

琉球大学学術リポジトリ

大学生の適応に関する心理学的研究2 －意欲と不安の観点からの分析－

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2010-02-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島袋, 恒男, 井村, 修, Shimabukuro, Tsuneo, Imura, Osamu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/15889

大学生の適応に関する心理学的研究Ⅱ*

— 意欲と不安の観点からの分析 —

島 袋 恒 男・井 村 修**

I 目 的

大学生の精神衛生上の問題として留年現象は、学生の意欲減退傾向 (student apathy) と深い関わりがあると指摘されている (藤土圭三, 1979)。笠原嘉 (1977) は、スチューデント・アパシーについて記述し、それが、きちょうめん、仕事好き、真面目、徹底的、完全主義、小心、責任感つよく、人と争えぬなど、強迫心性と関連が深いと指摘している。また上地安昭 (1973) は、広島大学の教養課程の学生を対象に「意欲減退度診断検査」を実施し、意欲減退傾向に関わる要因として主体的要因、大学環境要因、社会環境要因3つを上げている。意欲減退傾向は、笠原の主張するような個人のパーソナリティと関連した準神経症的側面と、上地の調査で明らかになったような集団としての学生気質の変化の側面とが考えられる。しかしいずれにしろ、大学生の適応問題を検討する場合、意欲について分析する必要がある。一方、新入生は生活面や勉強面で高校時代とは違った大きな変化を体験する。本学は地理的に遠隔地にあり、本土出身の学生の環境要因からの不安感は、入学時に強いといわれている。また青年期は、発達課題としての自我同一性の獲得をめぐる、揺れ動く時期であり不安の体験も適応問題の重要な要素となっている。したがって意欲と不安の2

* A Psychological Study on Adjustment of the University Students
II -An Analysis of Volition and Anxiety to the Life in the University -

** * Tsuneo Shimabukuro. Osamu Imura.

つの観点から大学生の適応問題を考えることは、有効な知見を得るものと期待される。

前回の報告(中村完 等, 1986)で、本学の新生の健康・適応調査の大学適応項目の分析から、適応度を予測する尺度として意欲の軸と不安の軸が抽出されることを指摘した。学部間の比較では、意欲の軸の高の方に医学部、低の方に農学部が位置した。不安の軸に関しては、高の方に教育学部、低の方に短大部が位置した。また出身地域により差が見られ、九州出身者は各県すべて不安高-意欲低の領域に位置し、他地域の出身者と大きな違いを見せていた。性差は女子学生の方が男子学生よりもやや意欲が高いが、不安の軸に関しては差は見られなかった。このような学部間の差や地域間の差は、第1志望の大学であったか否かが関連しているとして、不本意入学者という問題点から検討された。

今回の研究では、前回抽出された意欲の軸と不安の軸にQ1～Q100の各質問項目がどのように関わっているのかを検討し、大学生の適応度を予測する適切な尺度を見出すことを目的とする。まず各質問項目を数量化Ⅲ類により、いくつかの臨床尺度に整理する。それから数量化Ⅰ類とⅡ類を用い意欲の軸と不安の軸のそれぞれに各臨床尺度の質問項目がどのように関わっているかを見る。

Ⅱ 方法

1. 調査対象

本研究の調査者は前回の報告に同じく昭和60年度入学の琉球大学の学生1,117名である。調査対象者の性別・出身地域別内訳は表Ⅱ-1の通りである。調査対象者は男子が734名、女子が383名であり、出身地域では男女とも沖縄が最も多く(686名)、次いで九州(327名)となっており、両地域で全体の90%を占めている。表Ⅱ-2は調査対象者の性別・学部別内訳を示している。学部別で最も調査対象者の多いのは法文学部(243名)、教育学部(193名)であり、逆に少ないのは理学部(120名)、農学部(125名)である。

表Ⅱ－１ 調査対象者の性別・地域別内訳

地域 性	関東以北	中部・近畿	中国・四国	九州	沖縄	計
男子	45 (6.1)	34 (4.6)	7 (1.0)	243 (33.1)	405 (55.2)	734 (65.7)
女子	11 (3.0)	7 (2.0)	0 (0.0)	84 (21.9)	281 (73.8)	383 (34.3)
計	56 (5.0)	41 (4.0)	7 (0.6)	327 (29.3)	686 (61.4)	1,117 (100.0)

()内%

表Ⅱ－２ 調査対象者の性別・学部別内訳

学部 性	法文	教育	理学	医学	工学	農学	短期	計
男子	156 (21.3)	73 (9.9)	94 (12.8)	84 (11.4)	153 (20.8)	112 (15.3)	62 (8.4)	734 (65.7)
女子	87 (22.7)	120 (31.3)	26 (6.8)	59 (15.4)	6 (1.6)	13 (3.4)	72 (18.8)	383 (34.3)
計	243 (21.8)	193 (17.3)	120 (10.7)	143 (12.8)	159 (14.2)	125 (11.2)	134 (12.0)	1,117 (100.0)

()内%

2. 調査手続

昭和60年度の入学オリエンテーションの時に「健康・適応調査票」を配布し、その場で記入させ回収した。

3. 「健康・適応調査票」

昭和59年まで保健管理センターのカウンセラーであった新里里春（現教育学部助教授）が、入学時の呼び出し面接用の調査票として使用していた、100項目の精神的・身体的健康に関する質問項目に、新たに16項目の大学適応項目を追加したものを使用した。その内訳はQ1～Q6：病歴、Q7～Q21：ヒステリー、Q22～Q31：不安、Q32～Q42：心気・恐怖・強迫、Q

43～Q51：うつ、Q52～Q58：分裂、Q59～Q91：身体・心身症、Q92～Q100：脳器質障害、Q101～Q116：大学適応の計116の質問項目から構成されている。

4. 結果の処理

本研究では前回の数量化Ⅲ類による分析結果抽出された大学生活への「意欲」と大学生活への「不安」を中心として、同じく数量化Ⅲ類の分析結果抽出された、神経症不安、不安の身体化、不安の外在化、消化器不調感、循環器不調感、うつ傾向、分裂傾向との関連について数量化Ⅰ類、数量化Ⅱ類による分析を実施した。また、各尺度間の相間行列を算出し、尺度の全体的構造について探索し、同じく各尺度毎の平均値を算出した。その際出身地域（九州と沖縄）、性差を比較の視点とした。なお統計分析はすべてANALYSTによった。

Ⅲ 結果と考察

1節 数量化Ⅲ類に基づく各尺度の関係と平均値による出身地域別、性別比較

前回の報告で^{注1)}各項目を臨床心理学的に関係のあると思えるカテゴリーに分類し、その上で数量化Ⅲ類による分析を実施した。その結果、大学適応項目に関しては、大学生活への意欲の軸と大学生活への不安の2軸が抽出され、不安・心気症項目に関しては、神経症不安、不安の身体化、不安の外在化の3軸が抽出された。以上の各軸は不安神経症を予測させる尺度である。また、身体の不調感に関しては心身症を予測させる消化器不調感と循環器不調感の2軸が抽出された。さらに臨床心理学的に重篤な問題を予測させるものとして、うつ傾向と分裂傾向の2軸が抽出された。本節では

注1) 中村、新里、島袋、井村、1986. 大学生の適応に関する心理学的研究
法文学部紀要. 社会学篇 第29号

数量化Ⅲ類によって抽出された各軸（尺度）の相互関係を確認した上で、各尺度上での出身地域差（九州と沖縄）及び性差について検討していくことにする。

表1-1は全被験者を対象とした各尺度間の相関行列を示している。大学生生活への意欲が学生生活での適応につながる尺度であるのに対して、他のすべての尺度は学生生活での不適応を予測させる尺度である。従って大学生生活への意欲の尺度は他のすべての尺度と高い負の相関が予測されるといえる。しかし表に示される結果から、大学生生活への意欲と他のすべての尺度の間には高い負の相関は見られないことがわかる。わずかに大学生生活への意欲と神経症不安（ $r = -0.240$ ）、うつ傾向（ $r = -0.358$ ）、分裂傾向（ $r = -0.294$ ）の間に負の相関が見られるだけである。この結果は大学生生活への意欲の項目にいわゆる社会的望ましさの要因が影響していることが考えられる。しかしそれにもかかわらず、不安傾向が高く、かつ精神病理的傾向の高い者は大学生生活への意欲の低下をうかがわせていることがわかる。

次に大学生生活への不安は他のすべての尺度と高い正の相関を示すことが予想される。しかし表に示されるように、大学生生活への不安は、神経症不安（ $r = 0.382$ ）、不安の身体化（ $r = 0.297$ ）、分裂傾向（ $r = 0.383$ ）とある程度の相関を示しただけであり、他の尺度とは高い相関がないことがわかる。多分にこの結果は、大学生生活への不安が一貫した個人的傾向を示す特性不安の水準を反映する以上に、初めての沖縄、初めての大学生生活という事態がひき起した状態不安であることを予想させている。それにもかかわらず、神経症不安、うつ傾向、分裂傾向の有無は大学生生活への不安を十分に予測させている。また表に示される結果から、神経症不安、うつ傾向、分裂傾向間の相関が高く、不安エネルギーのうっ積ということで共通しているのであろうか。それに対して、不安の外在化、消化器、循環器不調感は相互に相関が低く、かつ他の尺度とも相関が低く、不安エネルギーのうっ積がないことを予想させている。

このような尺度間の関係は第一志望率の大きく異なる九州出身者と沖縄

表 1-1 各尺度の相関行列 (全体) N = 1038

尺 度	大学生生活への意欲	大学生生活への不安	神経症不安	不安の身体化	不安の外在化	消化器不調感	循環器不調感	うつ傾向
大学生生活への意欲								
大学生生活への不安	-0.157							
神経症不安	-0.240	0.382						
不安の身体化	-0.017	0.297	0.317					
不安の外在化	-0.149	0.172	0.290	0.165				
消化器不調感	-0.116	0.189	0.272	0.200	0.099			
循環器不調感	-0.106	0.132	0.269	0.257	0.104	0.203		
うつ傾向	-0.358	0.203	0.356	0.117	0.231	0.228	0.221	
分裂傾向	-0.294	0.383	0.566	0.249	0.293	0.249	0.263	0.497

表 1-2 各尺度の相関行列 (九州) N = 305

尺 度	大学生生活への意欲	大学生生活への不安	神経症不安	不安の身体化	不安の外在化	消化器不調感	循環器不調感	うつ傾向
大学生生活への意欲								
大学生生活への不安	-0.128							
神経症不安	-0.249	<u>0.381</u>						
不安の身体化	0.045	<u>0.272</u>	0.256					
不安の外在化	-0.055	0.179	<u>0.280</u>	0.194				
消化器不調感	-0.139	0.154	0.251	0.235	0.154			
循環器不調感	-0.096	0.150	<u>0.273</u>	<u>0.300</u>	0.156	<u>0.319</u>		
うつ傾向	<u>-0.476</u>	0.260	<u>0.389</u>	0.121	0.194	<u>0.317</u>	<u>0.344</u>	
分裂傾向	<u>-0.315</u>	<u>0.404</u>	<u>0.562</u>	0.225	0.240	0.238	<u>0.307</u>	<u>0.547</u>

出身者ではどのような結果を示すのであろうか。表1-2は九州出身者の各尺度間の相関行列を示している。表から大学生生活への意欲は全体的結果の場合と同様に、神経症不安($r = -0.249$)、うつ傾向($r = -0.476$)、分裂傾向($r = -0.315$)と負の相関が見られ、かつ全体的結果の場合よりその値が高く、不安傾向、精神病理的傾向は大学生生活への意欲の低下と強く結びついていることがわかる。

大学生生活への不安も、全体的結果と同様に神経症不安($r = 0.381$)、不安の身体化($r = 0.272$)、分裂傾向($r = 0.404$)と正の相関を示す結果にある。他の尺度間の関係では当然の如く神経症不安が、不安の外在化($r = 0.280$)、循環器不調感($r = 0.273$)、うつ傾向($r = 0.389$)、分裂傾向($r = 0.562$)と正の相関を示し、神経症不安の有無がより強い形で心身症、うつ傾向、分裂傾向と結びついていることを示している。また、全体的結果と異なるのは、消化器不調感が循環器不調感($r = 0.319$)、うつ傾向($r = 0.317$)と正の相関を示しており、循環器不調感の有無がうつ傾向($r = 0.344$)、分裂傾向($r = 0.307$)と正の相関を示しているところから、九州出身者の神経症的不安が強く、身体的にも、精神的にも拡散的になりつつあることをうかがわせている。

九州出身者に比較して第一志望率の高い沖縄出身者では、大学生生活への意欲、大学生生活への不安は他の尺度とどのように結びついているであろうか。表1-3は各尺度間の相関行列を示している。最初に注意すべきことは、大学生生活への意欲が他のすべての尺度と高い負の相関を示していないということである。先に述べたように大学生生活への意欲の項目に社会的望ましさの要因が影響しているのであろうか。あるいはそれだけ不安神経症、心身症、精神病理的傾向が相対的に弱いのであろうか。同様な傾向は大学生生活への不安と他の尺度の関係にも見られている。すなわち、大学生生活への不安は神経症不安($r = 0.336$)、分裂傾向($r = 0.336$)とだけ相関が見られ、それも九州出身者に比べて低い値となっている。しかし神経症不安は九州出身者と同様に不安の身体化($r = 0.306$)、不安の外在化($r = 0.293$)、うつ傾向($r = 0.331$)、分裂傾向($r = 0.564$)と相関を示し神

表 1-3 各尺度の相関行列 (沖縄) N = 634

尺 度	大学生活への意欲	大学生活への不安	神経症不安	不安の身体化	不安の外在化	消化器不調感	循環器不調感	うつ傾向
大学生活への意欲								
大学生活への不安	-0.049							
神経症不安	-0.195	<u>0.336</u>						
不安の身体化	0.012	<u>0.297</u>	<u>0.306</u>					
不安の外在化	-0.116	0.109	<u>0.293</u>	0.109				
消化器不調感	-0.071	0.181	0.256	0.157	0.013			
循環器不調感	-0.044	0.106	0.266	0.216	0.026	0.145		
うつ傾向	-0.262	0.129	<u>0.331</u>	0.068	0.228	0.195	0.158	
分裂傾向	-0.263	<u>0.336</u>	<u>0.564</u>	0.257	<u>0.342</u>	0.260	0.239	<u>0.461</u>

神経症不安は心身症、精神病理的傾向をうかがわせている。しかしながら消化器不調感、循環器不調感はうつ傾向、分裂傾向との相関は見られず、九州出身者のような神経症不安の身体的、精神的拡散傾向は見られていない。

先述したように出身地域によって各尺度間の結びつきが若干異なることがわかったが、このような各尺度間の結びつきは男子と女子ではどのように異なるであろうか。

表1-4は男子の、表1-5は女子における各尺度間の相関行列を示している。表1-4、表1-5から男女とも大学生活への意欲は神経症不安($r = -0.245$, $r = 0.25$)、うつ傾向($r = -0.364$, $r = -0.366$)、分裂傾向($r = -0.301$, $r = -0.299$)とだけ負の相関を示し特に男女差は見られず、男女とも神経症不安が高く、精神病理的傾向を示す者は大学生活への意欲の低いことがわかる。大学生活への不安は男女とも神経症不安($r = 0.389$ v s $r = 0.367$)、分裂傾向($r = 0.387$ v s $r = 0.375$)と同様の関係を示しているが、男子では不安の身体化($r = 0.334$)との結びつきが見られる。男女による差異が著しいのは、神経症不安と他の尺度との関係である。すなわち男子の神経症不安は不安の身体化($r = 0.348$)、不安の外在化($r = 0.333$)、消化器不調感($r = 0.319$)、循環器不調感($r = 0.309$)、うつ傾向($r = 0.372$)、分裂傾向($r = 0.582$)と正の相関が見られ、神経症不安の身体的・精神的拡散傾向が見られるが、女子の神経症不安はうつ傾向($r = 0.325$)、分裂傾向($r = 0.541$)と正の相関が見られ、神経症不安の身体的拡散傾向は見られていない。

以上に述べてきたように、各尺度間の結びつきに少なからず出身地域差、性差が見られるが、各尺度の平均値では出身地域差、性差が見られるであろうか。

表1-6は出身地域別に各尺度の平均値を比較したものである。当初予測されたように大学生活への意欲の尺度では第一志望率の高い沖縄出身者の得点が高く、大学生活への不安では逆に九州出身者の得点が高い結果にある。また同様に神経症不安、不安の身体化、不安の外在化、消化器不調感、循環器不調感、うつ傾向、分裂傾向のすべての尺度の平均値において

表1-4 各尺度の相関行列 (男子) N=672

尺 度	大学生活への意欲	大学生活への不安	神経症不安	不安の身体化	不安の外在化	消化器不調感	循環器不調感	うつ傾向
大学生活への意欲								
大学生活への不安	-0.148							
神経症不安	-0.245	<u>0.389</u>						
不安の身体化	-0.042	<u>0.334</u>	<u>0.348</u>					
不安の外在化	-0.178	0.147	<u>0.333</u>	0.189				
消化器不調感	-0.110	0.203	<u>0.319</u>	0.201	0.147			
循環器不調感	-0.103	0.129	<u>0.309</u>	0.258	0.164	0.173		
うつ傾向	<u>-0.364</u>	0.208	<u>0.372</u>	0.153	<u>0.295</u>	0.215	0.187	
分裂傾向	<u>-0.301</u>	<u>0.387</u>	<u>0.582</u>	0.285	<u>0.309</u>	0.257	<u>0.312</u>	<u>0.525</u>

表1-5 各尺度の相関行列(女子) N=362

尺度	大学生生活への意欲	大学生生活への不安	神経症不安	不安の身体化	不安の外在化	消化器不調感	循環器不調感	うつ傾向
大学生生活への意欲								
大学生生活への不安	-0.202							
神経症不安	-0.252	<u>0.364</u>						
不安の身体化	0.042	0.231	0.266					
不安の外在化	-0.137	0.222	0.224	0.130				
消化器不調感	-0.118	0.155	0.171	0.201	0.026			
循環器不調感	-0.125	0.136	0.198	0.259	0.016	0.263		
うつ傾向	<u>-0.366</u>	0.195	<u>0.325</u>	0.051	0.131	0.262	<u>0.285</u>	
分裂傾向	<u>-0.299</u>	0.375	<u>0.541</u>	0.193	0.279	0.225	0.166	<u>0.451</u>

表 1-6 各尺度における平均値による出身地域別比較

要因 出身地域	大学生生活 への意欲	大学生生活 への不安	神経症不安	不安の身体化	不安の外在化	消化器不調感	循環器不調感	うつ傾向	分裂傾向
九州	3.563 (1.069)	2.657 (1.568)	1.566 (1.643)	1.009 (0.994)	0.367 (0.641)	0.449 (0.750)	0.291 (0.697)	0.351 (0.841)	1.204 (1.247)
沖縄	4.417 (0.841)	1.937 (1.245)	1.142 (1.441)	0.853 (0.912)	0.153 (0.414)	0.285 (0.590)	0.167 (0.516)	0.240 (0.675)	0.878 (1.223)
七 値	-12.65 ***	7.21 ***	3.97 ***	2.47 **	5.50 ***	3.45 ***	2.83 **	2.10 **	2.13 **

() 内SD ** P<.01, *** P<.001

九州出身者の得点が高く、九州出身者は不安神経症、心身症、精神病的傾向の高いことがわかり、その結果として大学生生活への不安が高いことがわかる。

次に男女差について検討していくと、表1-7の結果から大学生生活への意欲は女子の得点が高く、また不安の外在化でも女子の得点が高いことがわかる。この結果は男子より女子の進学における要求水準が低く、従って自らの進学への満足度が高いことを示し、一般的に女子の恐怖が高いことを反映した結果であろう。しかし、大学生生活への不安、神経症不安、不安の身体化、消化器不調感、循環器不調感、うつ傾向、分裂傾向の程度に男女差は見られていない。このような結果から各尺度の下位項目への反応率に性差のあることが予想される。以下2節、3節において大学生生活への意欲を代表する項目としてQ101の第一志望の項目を外的基準、各尺度の下位項目を説明変数とする数量化Ⅱ類による分析と、大学生生活への不安の程度を外的基準、各尺度の下位項目を説明変数とする数量化Ⅰ類による分析を実施していくことにする。

注2) 大学生生活への意欲の尺度は全体的に通過率が高い為、正規分布を示さないことから、項目の適切さと、通過率の程度から、Q101のみを外的基準とした。

表 1-7 各尺度の平均値による性別比較

要因 性	大学生活 への意欲	大学生活 への不安	神経症不安	不法の身体化	不法の外在化	消化器不調感	循環器不調感	うつ傾向	分裂傾向
男子	4.024 (1.058)	2.184 (1.497)	1.311 (1.592)	0.934 (0.942)	0.185 (0.472)	0.358 (0.691)	0.216 (0.603)	0.291 (0.795)	1.157 (1.369)
女子	4.333 (0.866)	2.267 (1.292)	1.355 (1.512)	0.916 (0.994)	0.274 (0.561)	0.294 (0.592)	0.213 (0.604)	0.285 (0.728)	1.204 (1.247)
七 値	-5.20 ***	-0.96 ns	-0.45 ns	0.30 ns	-2.63 **	1.63 ns	0.07 ns	0.12 ns	-0.28 ns

() 内SD ** P<.01 *** P<.001

2 節 数量化Ⅱ類による「意欲」の分析

2-1 神経症的不安項目の分析

Q22, Q23, Q24, Q29, Q30, Q31の6項目が、神経症的不安を示す項目として数量化Ⅲ類による分析結果から抽出されたので、これらの項目とQ101の関連を見ていくことにする。全体の傾向としては、Q22とQ29に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と回答することがわかった(図2-1)。九州地区出身者では、Q29に「はい」と答えた者は、Q101に「はい」と答える傾向があった(図2-2)。逆に沖縄地区出身者は、Q29に「はい」と答えた者はQ101に「いいえ」と答えることが多かった(図2-3)。男子学生では、Q22とQ29に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答える傾向があった(図2-4)。女子学生では、Q24, Q29, Q30で「はい」と答えた者は、Q101で「いいえ」と答えることがわかった(図2-5)。以上の結果から、九州地区出身者でQ29の「いつも緊張していらいますか」を肯定する者は、第1志望である確率が高いが、沖縄地区出身者では、逆に第2志望であることがわかった。Q22の不安を訴える者は、第2志望であることがわかった。またQ23とQ31の項目以外の項目が、Q101と関連が強いことがわかった。

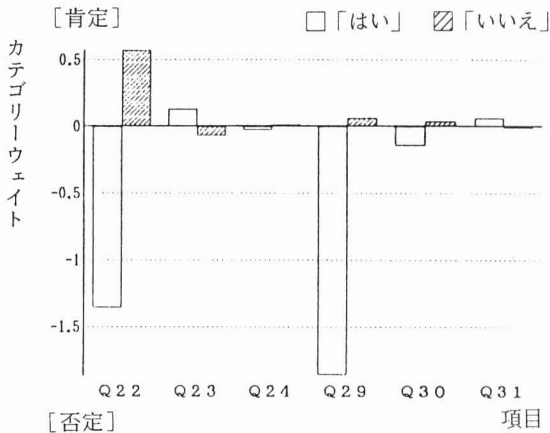


図2-1 神経症的不安項目の分析(全体)

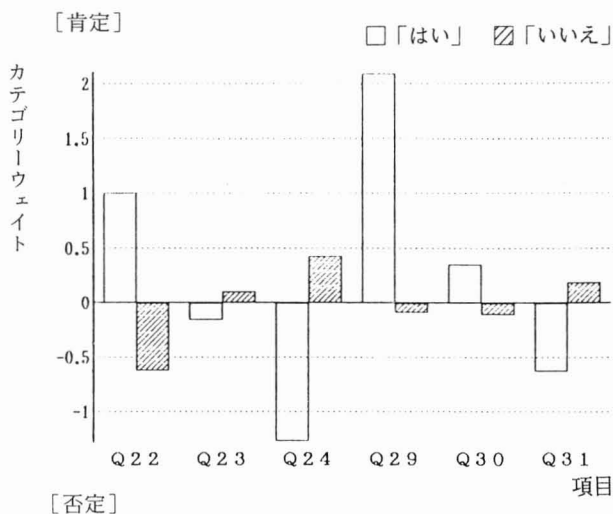


図 2 - 2 神経症的不安項目の分析

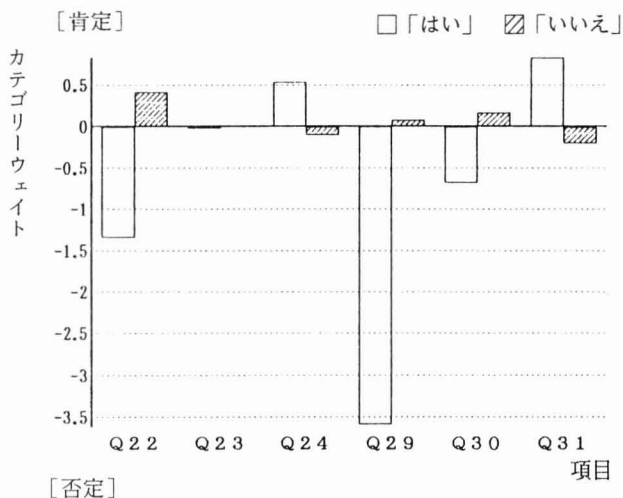


図 2 - 3 神経症的不安項目の分析（沖縄）

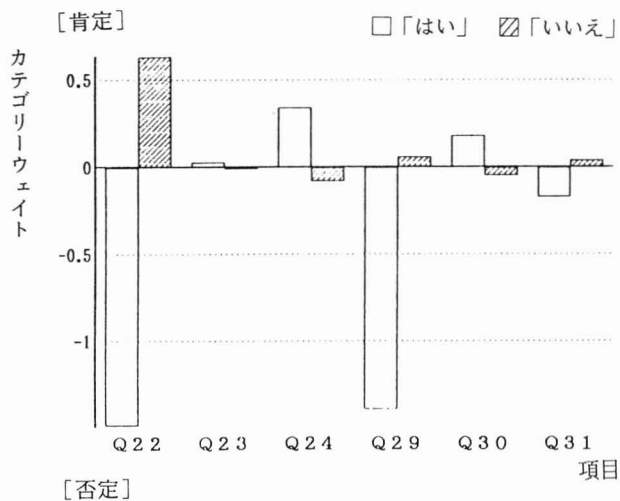


図 2 - 4 神経症的不安項目の分析 (男子)

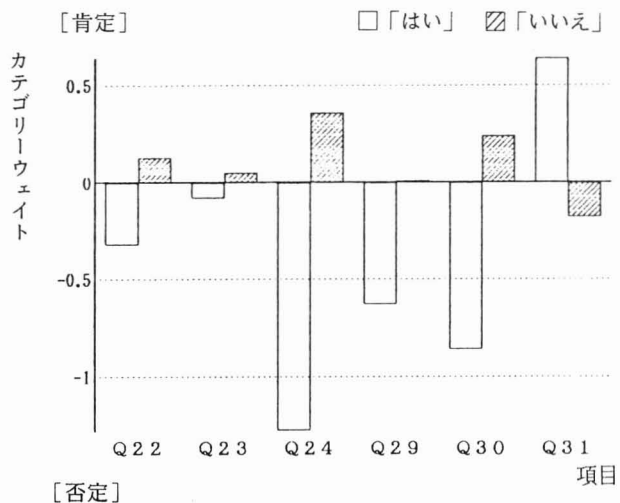


図 2 - 5 神経症的不安項目の分析 (女子)

2-2 身体的不安項目の分析

Q32, Q33, Q34, Q35の4の項目が、身体的不安を示す項目として数量化Ⅲ類による分析結果から抽出されたので、これらの項目とQ101の関連を見ていくことにする。全体の傾向としては、Q33とQ34に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答える傾向にあることがわかった(図2-6)。九州地区出身者では、Q32に「はい」と答えた者はQ101に「はい」と答え、Q32に「いいえ」の場合はQ101に「いいえ」であった。またQ34, Q35に「はい」と回答した者は、Q101に「いいえ」と答える傾向にあった(図2-7)。沖縄県出身者では、Q33, Q34に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と回答することがわかった。Q35に「はい」と答える者は、Q101で「はい」と答える傾向があることがわかった(図2-8)。男子学生では、Q33, Q35に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答えていた(図2-9)。女子学生では、Q34に「はい」と答える者は、Q101に「いいえ」と回答する確率が高い(図2-10)。以上の結果から、身体的不安を訴える者は、第2志望者に多いことがわかった。特にQ33, Q34がQ101と関連が強いことがわかった。

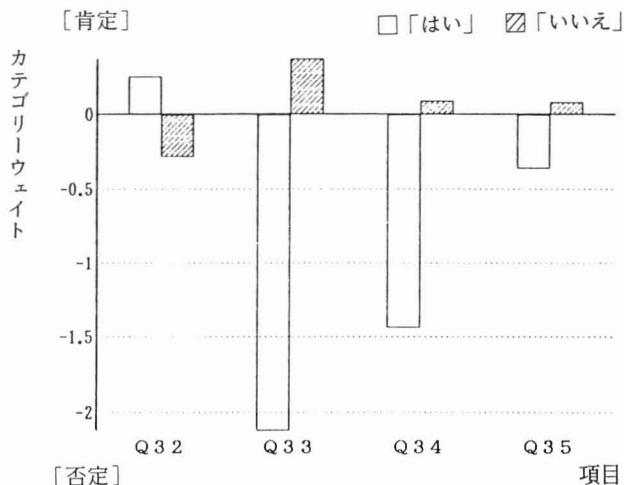


図2-6 身体的不安項目の分析(全体)

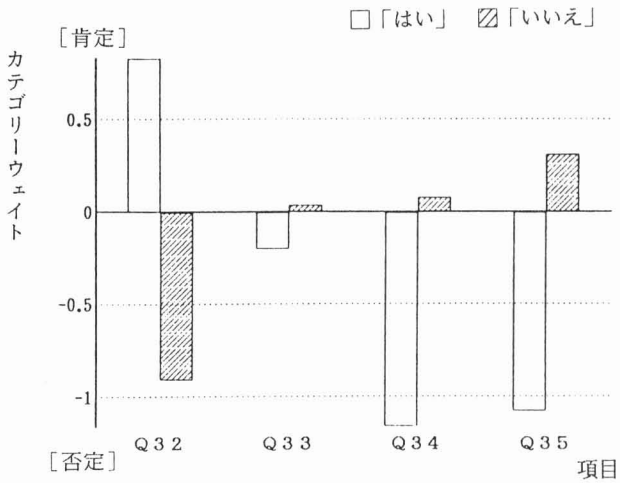


図2-7 身体的不安項目の分析(九州)

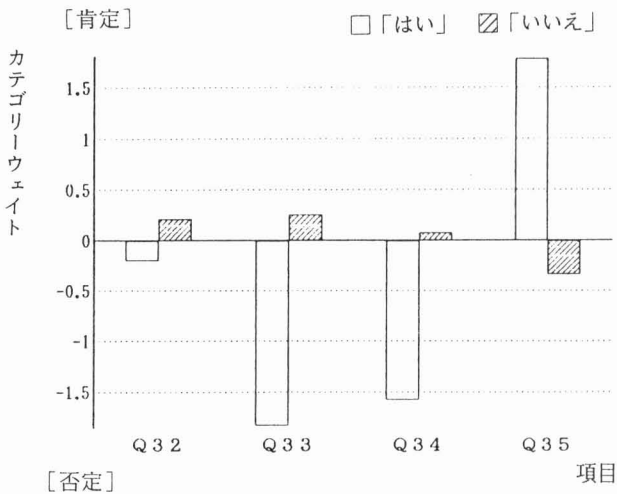


図2-8 身体的不安項目の分析(沖縄)

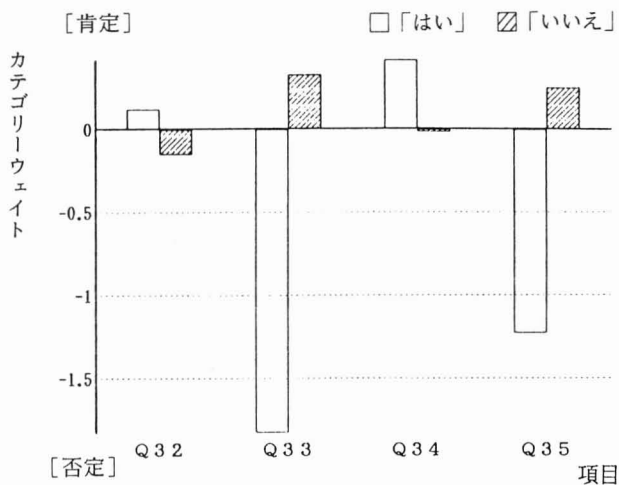


図2-9 身体的不安項目の分析（男子）

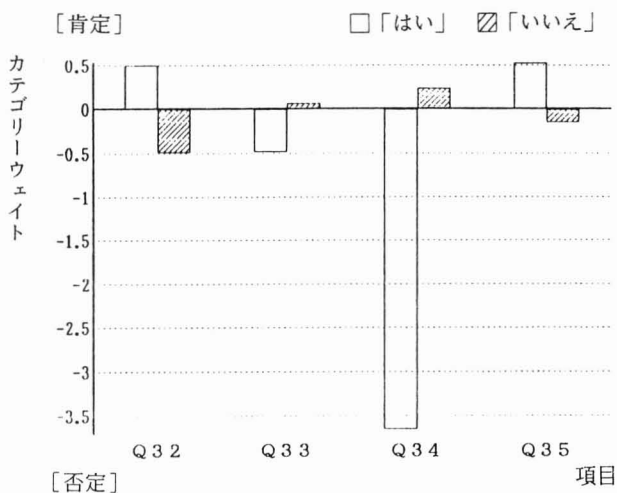


図2-10 身体的不安項目の分析（女子）

2-3 恐怖症項目の分析

Q25, Q26, Q27の項目が、恐怖症傾向を示す項目として数量化Ⅲ類による分析結果から抽出されたので、これらの項目とQ101の関連を見ていくことにする。全体では、Q25, Q27に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答えることがわかった(図2-11)。九州地区出身者はQ25, Q26で「はい」と答えた場合、Q101で「いいえ」と答えることが多い(図2-12)。沖縄地区出身者は、Q26, 27で「はい」と答えた者は、Q101で「いいえ」と答えることがわかった(図2-13)。男子学生では、Q25に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答えていた(図2-14)。女子学生では、Q25, Q26, Q27の3項目ともに「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答える傾向が見られた(図2-15)。恐怖症項目に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答える者が多いことがわかった。

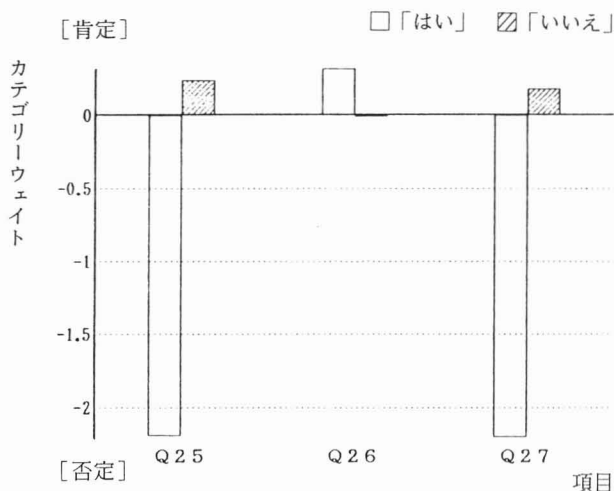


図2-11 恐怖症項目の分析(全体)

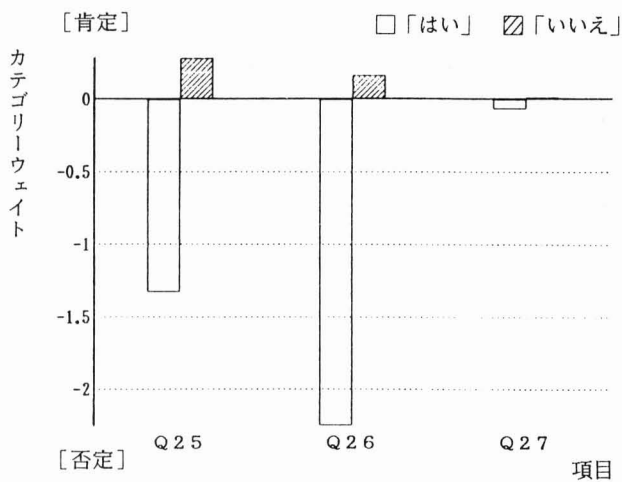


図2-12 恐怖症項目の分析 (九州)

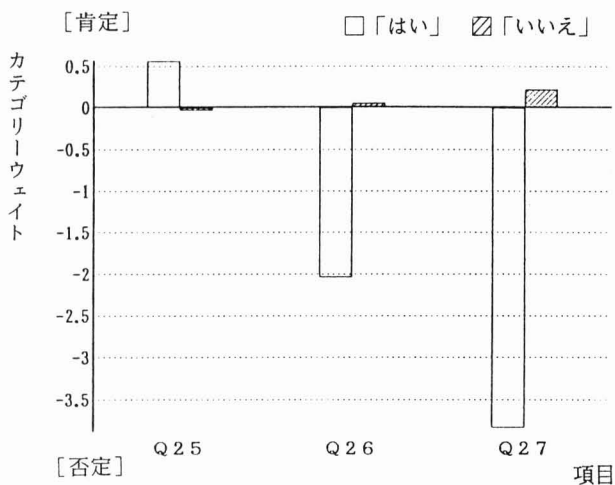


図2-13 恐怖症項目の分析 (沖縄)

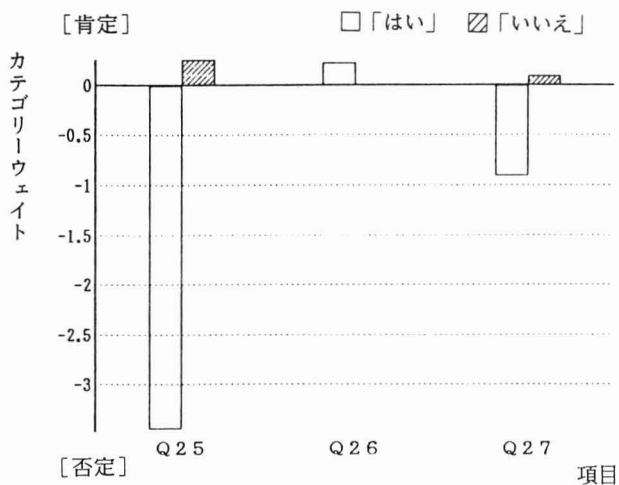


図 2-14 恐怖症項目の分析 (男子)

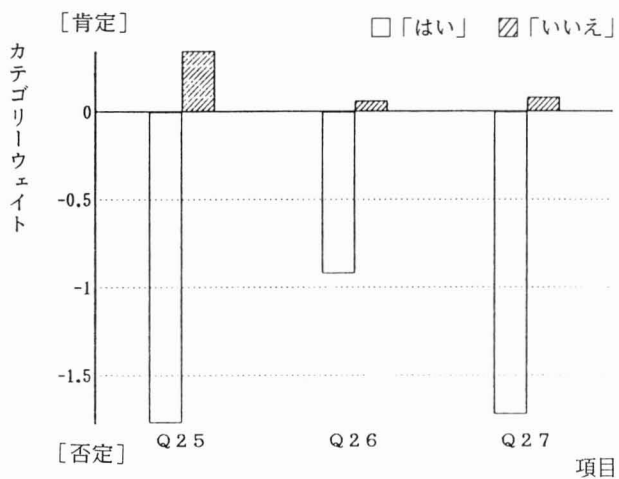


図 2-15 恐怖症項目の分析 (女子)

2-4 消化器系項目の分析

Q65, Q80, Q81, Q84の4項目が、消化器系の状態を示す項目として数量化Ⅲ類による分析結果から抽出されたので、これらの項目とQ101の関連を見ていくことにする。全体の傾向として、Q65, Q80, Q84で「はい」と答える者はQ101で「いいえ」と答え、Q81で「はい」と答えた者は、Q101で「はい」と答える傾向にあることがわかった(図2-16)。九州地区出身者は、Q80で「はい」と答えた者はQ101でも「はい」と答え、Q81で「はい」と答えた者はQ101では「いいえ」と答えていた(図2-17)。沖縄地区出身者では、Q81に「はい」と答えた者はQ101に「いいえ」と答える傾向があった(図2-18)。男子学生では、Q81に「はい」と回答した者はQ101にも「はい」と答え、Q84に「はい」と答えた者はQ101に「いいえ」と答えていることがわかった(図2-19)。女子学生では、Q65に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と回答し、Q81に「はい」と答えた者はQ101に「はい」と答える傾向があった(図2-20)。以上の結果から、消化器系の不調感を訴える者が、必ずしも第2志望者に多いとはいえない。男子学生、女子学生ともにQ81に「はい」と答えた者が第1志望と答える傾向が強いからである。従ってこれらの項目からQ101の結果を予測するのは困難であろう。

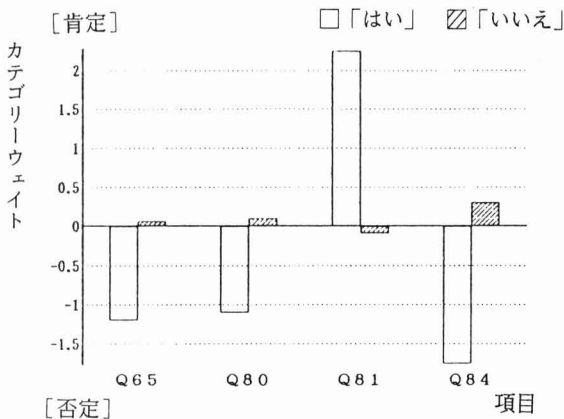


図2-16 消化器項目の分析(全体)

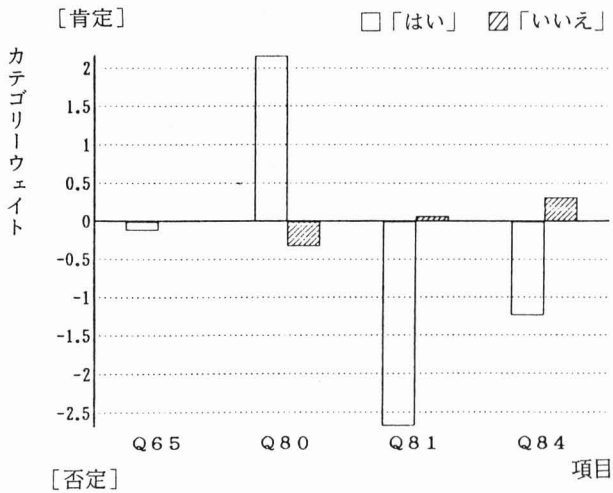


図 2-17 消化器項目の分析 (九州)

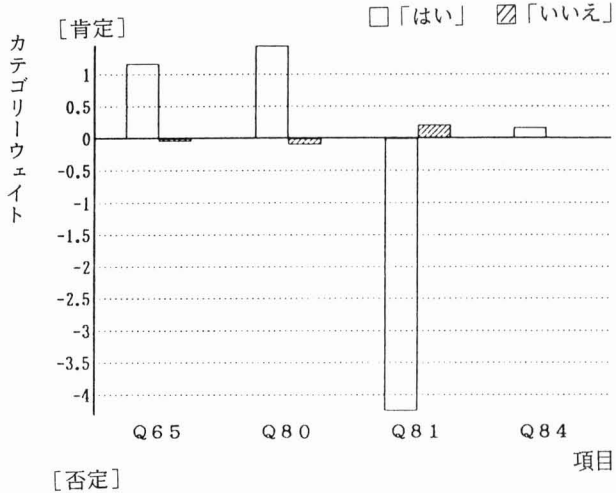


図 2-18 消化器項目の分析 (沖縄)

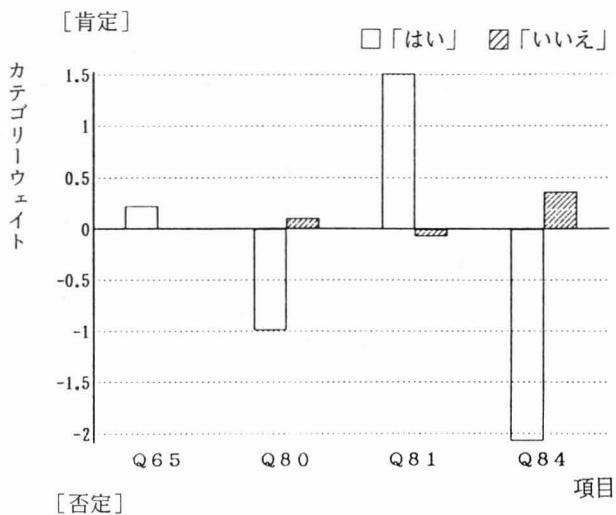


図 2-19 消化器項目の分析（男子）

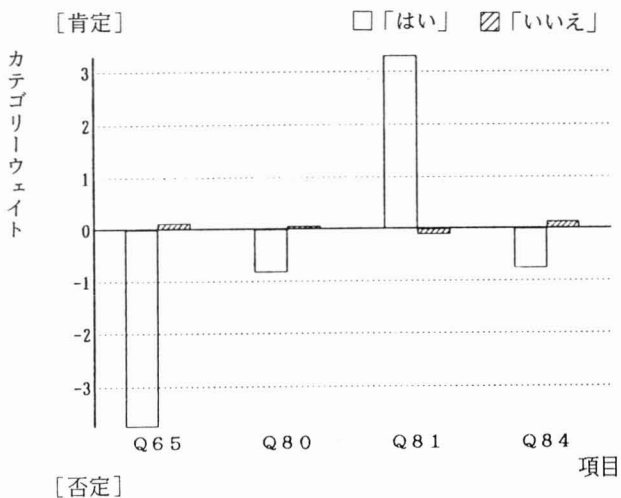


図 2-20 消化器項目の分析（女子）

2-5 循環器系項目の分析

Q67, Q69, Q70, Q71, Q72の5項目が、循環器系の状態を示す項目として数量化Ⅲ類による分析結果から抽出されたので、これらの項目とQ101の関連を見ていくことにする。全体の傾向は、Q69, Q70に「はい」と答えた者はQ101に「いいえ」と答え、Q71に「はい」と答えた者はQ101に「いいえ」と答えることがわかった(図2-21)。九州地区出身者では、Q70に「はい」と答えた者はQ101に「はい」と答える傾向があり、Q71に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と回答している(図2-22)。沖縄地区出身者では、Q69, Q70に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答えている(図2-23)。男子学生では、Q67, Q69, Q70に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答えている(図2-24)。女子学生では、Q69, Q70に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答える傾向がある(図2-25)。循環器系の不調感のなかではQ69とQ70が、Q101と関連が深く、第2志望者であること関連性がある。この2項目は明確な身体的異常というより、心理的の圧迫感や緊張感を示唆する項目といえる。

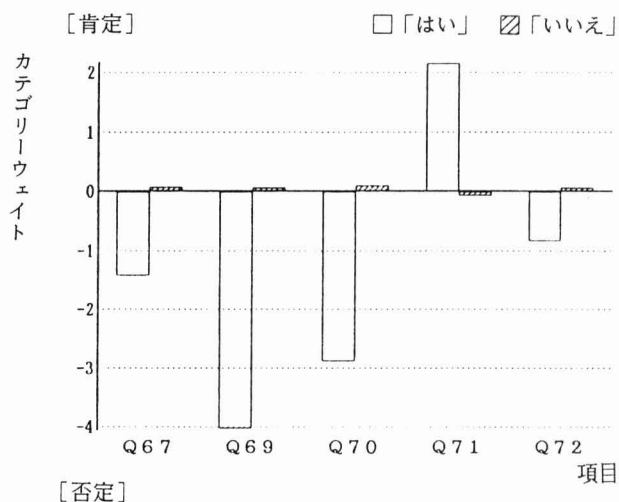


図2-21 循環器項目の分析(全体)

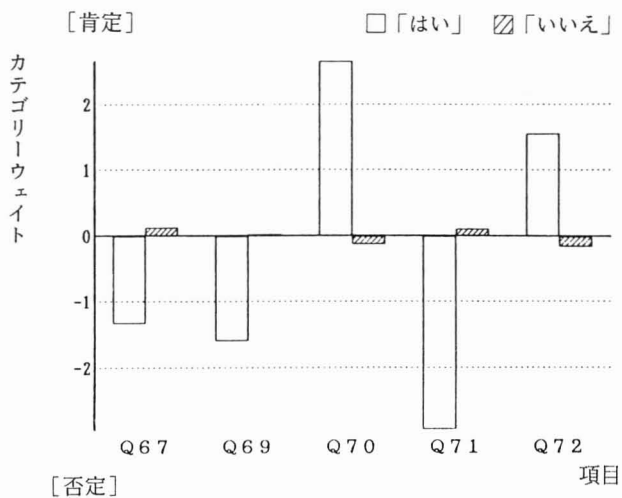


図 2-22 循環器項目の分析（九州）

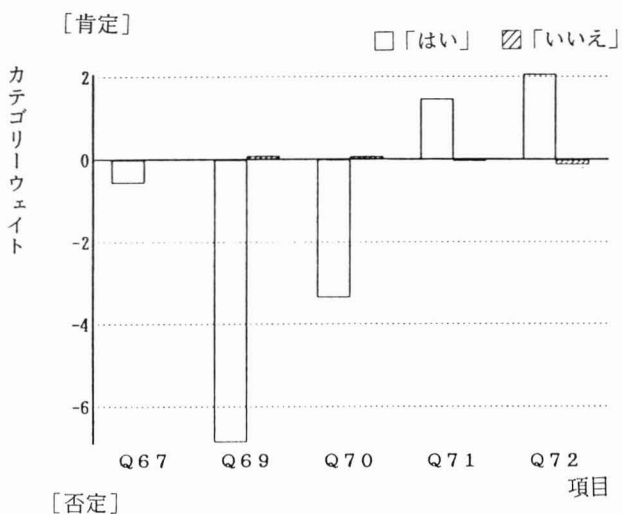


図 2-23 循環器項目の分析（沖縄）

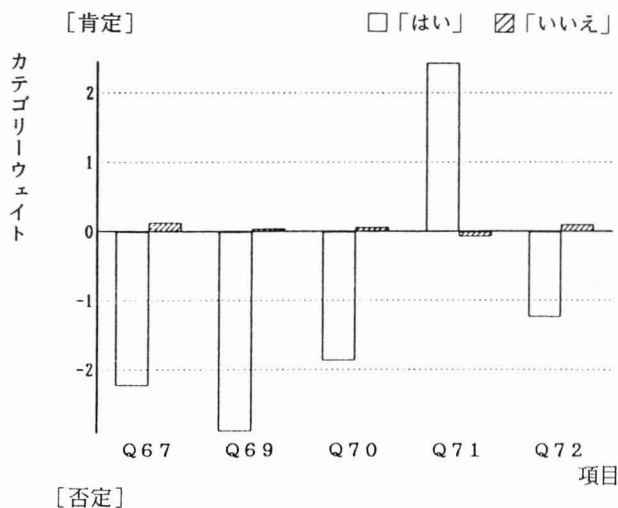


図2-24 循環器項目の分析(男子)

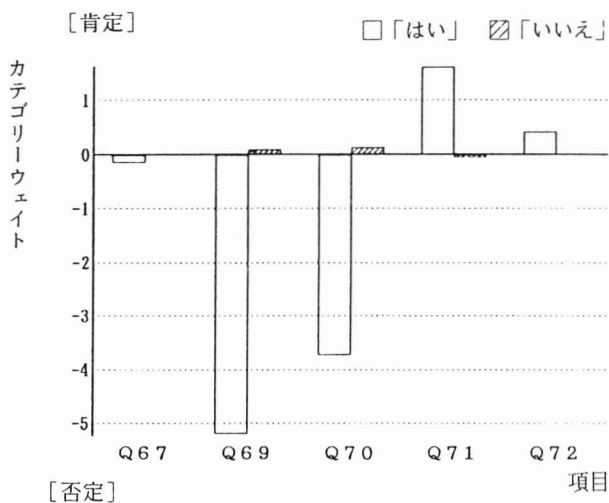


図2-25 循環器項目の分析(女子)

2-6 うつ病的項目の分析

Q44, Q45, Q46, Q49, Q50, Q51の6項目が、うつ病的傾向を示す項目として数量化Ⅲ類による分析結果から抽出されたので、これらの項目とQ101の関連を見ていくことにする。全体的傾向としては、Q51に「はい」と答える者は、Q101に「いいえ」と答える確率が高い(図2-26)。九州地区出身者で、Q44に「はい」と答えた者はQ101に「いいえ」と答えることがわかった(図2-27)。沖縄地区出身者では、Q51に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答える傾向が見られた(図2-28)。男子学生でも、Q51に「はい」と答えた者はQ101に「いいえ」と回答することがわかった(図2-29)。また女子学生ではQ50, Q51に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答えることがわかった(図2-30)。以上の結果から九州地区出身者で、Q44の「何をしても楽しくなく、気がめいりますか」に「はい」と答える者は第2志望者であることがわかった。またQ51の「いっそ死んでしまいたいとよく思いますか」の質問項目は、意欲の低下傾向と強く関連があることが示唆された。

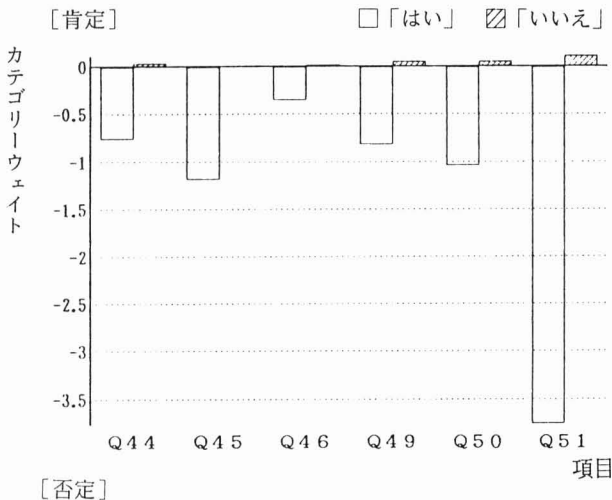


図2-26 うつ病項目の分析(全体)

大学生の適応に関する心理学的研究Ⅱ(島袋)(井村)

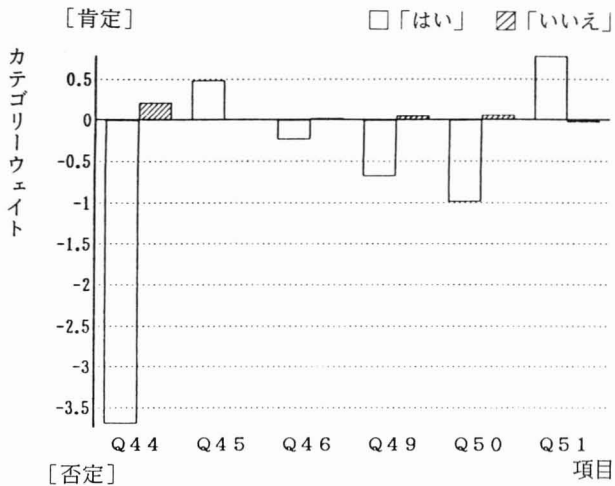


図 2-27 うつ病項目の分析 (九州)

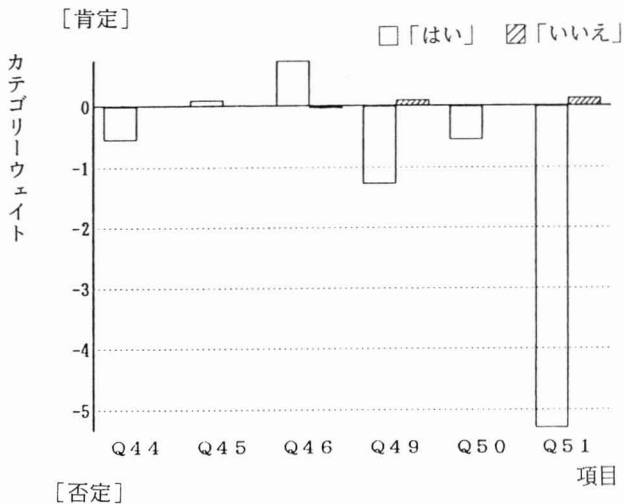


図 2-28 うつ病項目の分析 (沖縄)

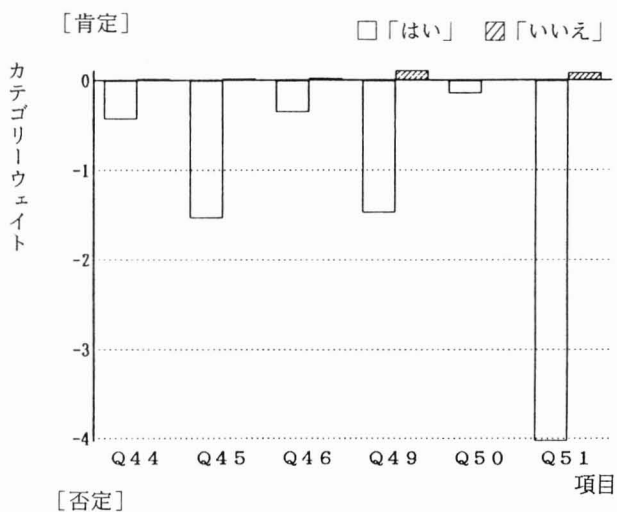


図2-29 うつ病項目の分析 (男子)

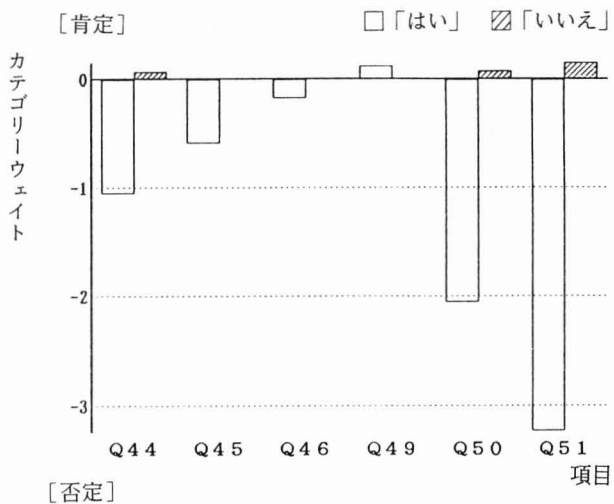


図2-30 うつ病項目の分析 (女子)

2-7 分裂病的項目の分析

Q39, Q42, Q52, Q53, Q55, Q58の6項目、分裂病的傾向を示す項目として数量化Ⅲ類による分析結果から抽出されたので、これらの項目とQ101の関連を見ていくことにする。全体の傾向としては、Q42に「はい」と答えた者はQ101に「いいえ」と答えることがわかった(図2-31)。九州地区出身者ではQ53に「はい」と答えた者はQ101に「はい」と答えることがわかった(図2-32)。沖縄地区出身者では、Q42, Q55に「はい」と答えた者はQ101に「いいえ」と答える傾向が見られた。またQ58に「はい」と答えた者はQ101に「はい」と答えることがわかった(図2-33)。男子学生では、Q42, Q55に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答えることがわかった(図2-34)。女子学生では、Q42, 52に「はい」と答えた者はQ101に「いいえ」と回答する傾向があった(図2-35)。以上の結果から、九州地区出身者でQ53の「まわりの人や物を見て実感がわかぬように思いますか」や沖縄地区出身者でQ58の「目上の人が見ていると、仕事がさっぱりできなくなりますか」を肯定する者が第1志望と関連があることは、予想とことなるものであった。しかしQ42の「不快な考えがくりかえし頭にうかんできて、はらいのけることができませんか」を肯定する者は第2志望であることと関連し、この項目は意欲の低下傾向を示唆するものであることがわかった。

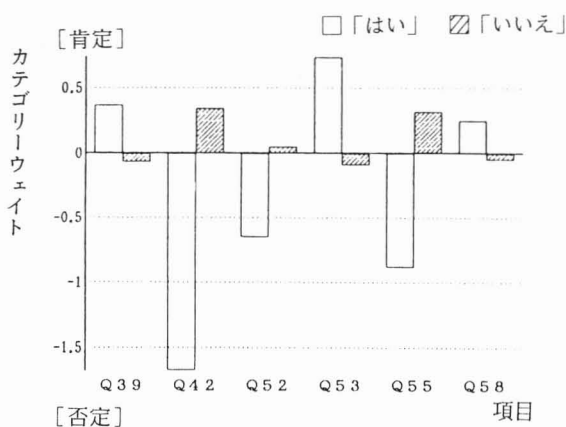


図2-31 分裂病項目の分析(全体)

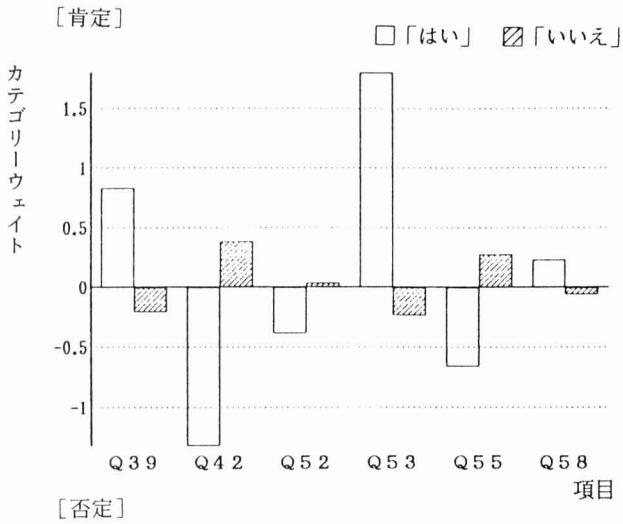


図2-32 分裂病項目の分析（九州）

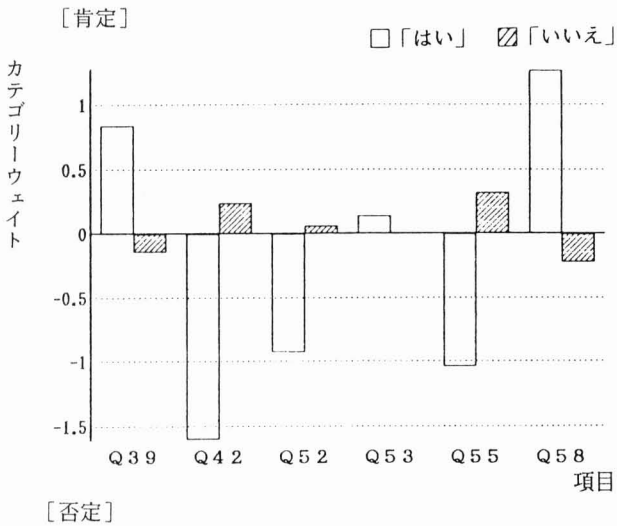


図2-33 分裂病項目の分析（沖縄）

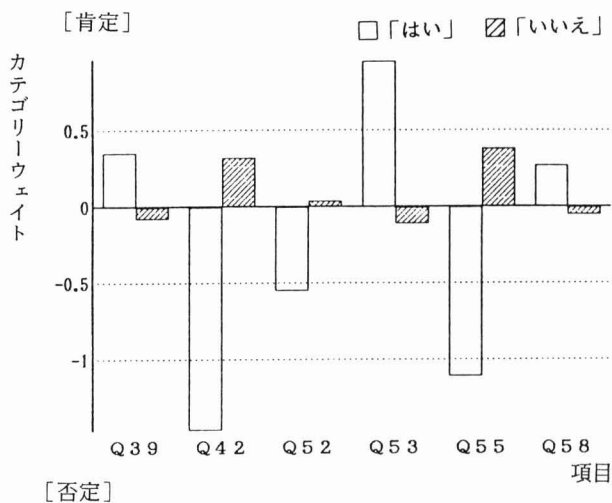


図 2-34 分裂病項目の分析 (男子)

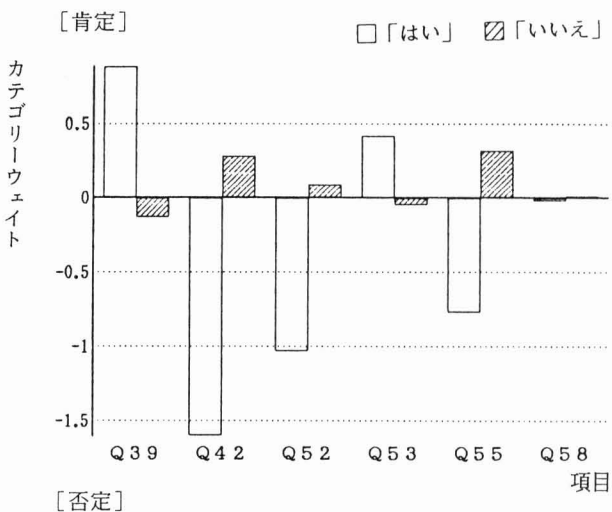


図 2-35 分裂病項目の分析 (女子)

今回の分析で使用された質問項目は次のようなものであった。の項目は、Q101の回答と関連の強い項目である。()の数字は、全体のなかで「はい」と答えられた比率である。

神経症的不安項目

- Q22 いつも何かと心配ごとがありますか。(29.4)
- Q23 ちょっとしたことがすべて気になって、気づかれますか。(35.1)
- Q24 はっきりした原因がないのに、いろいろのことが不安になりますか。(20.1)
- Q29 いつも緊張していらいらしていますか。(3.6)
- Q30 人の言動が気にさわっていらいらしますか。(22.7)
- Q31 ちょっとしたことがカンにさわって腹が立ちますか。(22.2)

身体的不安項目

- Q32 自分の身体や病気のことに非常に関心をもっていますか。(52.7)
- Q33 自分の健康のことが心配で仕方がないですか。(14.9)
- Q34 日によって体の具合の悪いところが移動しますか。(6.2)
- Q35 その時の気分によって、症状がよくなったり、悪くなったりしますか。(19.1)

恐怖症項目

- Q25 ひとりで外出するのが不安ですか。(10.1)
- Q26 新聞やラジオでこわいニュースを見聞きするとひどくおびえますか。(3.8)
- Q27 いつもそわそわして落ち着きませんか。(7.7)

消化器系項目

- Q65 いつもあまり食欲がないですか。(5.5)
- Q80 いつも胃がもたれたような感じがありますか。(8.9)
- Q81 よく吐き気がしたり、吐いたりしますか。(4.0)
- Q84 よく腹が痛みますか。(15.1)

循環器系項目

- Q67 よく動きがしますか。(5.9)
- Q69 胸を圧迫されるようで苦しいですか。(1.9)
- Q70 脈が急に早くなったり、狂ったりしますか。(3.5)
- Q71 よく息苦しくなることがありますか。(3.4)
- Q72 急に体がかっと熱くなったり、寒気がしたりしますか。(7.3)

うつ病的項目

- Q44 何をしても楽しくなく、気がめいりますか。(5.5)
- Q45 いつも不幸で憂うつですか。(1.5)
- Q46 何をするにもおっくうで意欲がわきませんか。(7.3)
- Q49 たえず罪悪感(自分が何か悪いことをしたような感じ)に悩んでいますか。(7.0)
- Q50 将来に全く希望が無いように思えますか。(4.8)
- Q51 いっそ死んでしまいたいとよく思いますか。(3.2)

分裂病的項目

- Q39 特定の状況(人の前で赤くなるなど)にたいする恐怖心がありますか(どんな状況ですか)。(21.4)
- Q42 不快な考えがくりかえ頭にかんできて、はらいのけることができませんか。(17.1)
- Q52 自分が自分でないような感じがしますか。(8.0)
- Q53 まわりの人や物を見て、実感がわかぬ(現実感がない)ように思えますか。(11.3)
- Q55 劣等感が強いですか。(26.8)
- Q58 目上の人が見ていると、仕事がさっぱりできなくなりますか。(17.1)

3 節 数量化Ⅰ類による大学生生活への「不安」の分析

前節の数量化Ⅱ類による大学生生活への「意欲」の分析に引き続き、本節では大学生生活への「不安」の得点を外的基準として、そして前回の数量化Ⅲ類の分析結果として抽出された神経症不安、不安の身体化、不安の外在化・顕在化、消化器不調感、循環器不調感、うつ傾向、分裂傾向の下位項目を各々説明度数とする数量化Ⅰ類による分析を試みた。すなわち、各々の説明度数がどの程度、大学生生活への「不安」を説明し、かつ各下位項目への回答パターンがどのように大学生生活への「不安」を説明しているかの探索が行なわれた。以下、大学生生活への「不安」と神経症不安、不安の身体化、不安の外在化・顕在化・消化器不調感、循環器不調感、うつ傾向、分裂傾向の関連について、地域差、性差を比較・検討しながら考察を進めていくことにする。

3-1 大学生生活への「不安」と神経症不安

数量化Ⅲ類の分析によって抽出された神経症不安とは、Q22、Q23、Q24、Q29、Q30、Q31の合計で示される得点であり、隠蔽、抑圧された不安の存在を示しており、状況によってひき起こされる状態不安ではなく、かなり一貫した個人的傾性を示す特性不安と見なすことができる。すなわち、特性不安の存在は大学生生活への「不安」の生起の仕方を大きく規定しているものと予想される。

図3-1は全被験者における大学生生活への「不安」を外的基準、神経症不安の各項目を説明変数とする数量化Ⅰ類の分析結果を示している。その結果、尺度全体と大学生生活への「不安」との関わりはそれほど高くないことがわかる。このことは、大学生生活への「不安」が特性的な神経症不安の有無に強く左右されず、初めて体験する沖縄・大学という環境が不安をひき起こしていることを意味している。それにもかかわらず、Q22「いつも何かと心配ごとがある」、Q29「いつも緊張していらいらしている」の2項目への肯定的反応はウエイトが高く、大学生生活への「不安」に大きく関

係していることがわかる。逆に、Q23「ちょっとしたことがすべて気になって気づかれする」、Q30「人の言動が気にさわっていらいらする」、Q31「ちょっとしたことが気になって腹が立つ」の3項目へのウエイトは低く、大学生生活への「不安」の生起にほとんど関与していないことを示している。

それでは、第一志望率において大きな差異を示していた九州と沖縄の出身者の大学生生活への「不安」は、神経症的不安とどのようにかかわっているであろうか。図3-2、図3-3は九州各県出身者と沖縄県出身者の大学生生活への「不安」を外的基準・そして神経症不安の各項目を説明変数とする数量化Ⅰ類の分析結果を示しているが、両出身者ともQ22、Q24とのかかわりは認められ、特に出身地域差は認められない。

図3-4、図3-5は、男性、女性における数量化Ⅰ類の結果を示している。大学生生活への「不安」に最も強くかかわっているのは、男女とも同様にQ22への肯定的反応であるが、性差の見られる項目がある。すなわち、男性ではQ24「はっきりした原因がないのにいろいろなことが不安になる」、Q29「いつも緊張していらいらしている」という項目への肯定的反応へのウエイトが高く、大学生生活への「不安」と強く関係していることがわかる。

以上、述べてきたように、神経症的不安の有無が大きく大学生生活への「不安」を予測させるものではないことがわかる。このような結果から、大学生生活への「不安」は特性不安ではなく、状態不安であると見なした方がよいであろう。しかし、女性の場合とは異なり、男性の神経症不安は大学生生活への「不安」と関係していることがわかる。

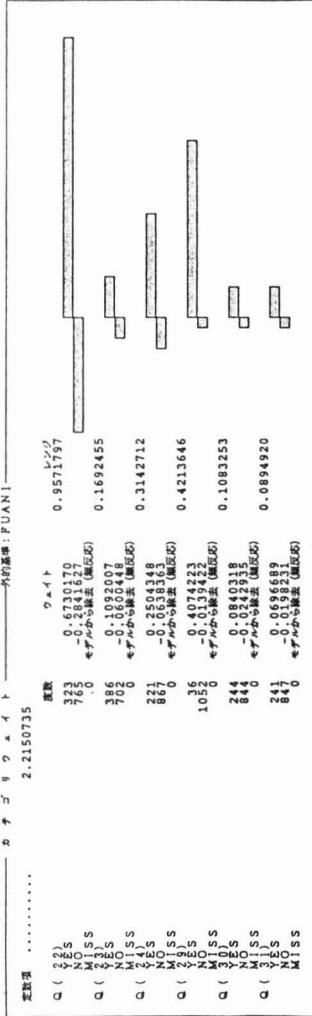


図3-1 大学生活への不安と神経症不安 (全体)

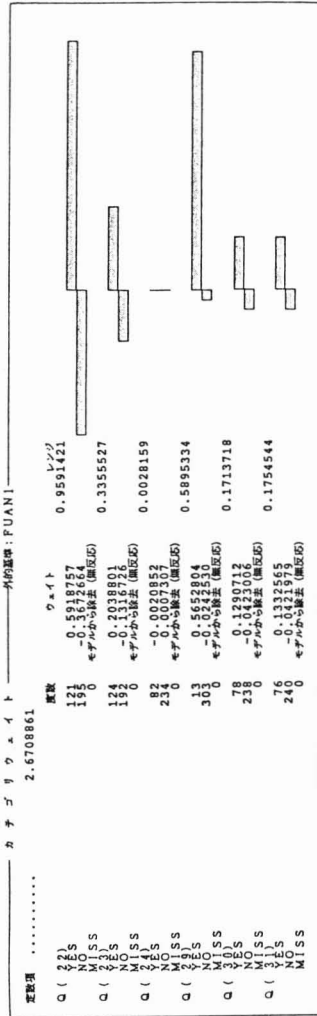


図3-2 大学生活への不安と神経症不安 (九州)

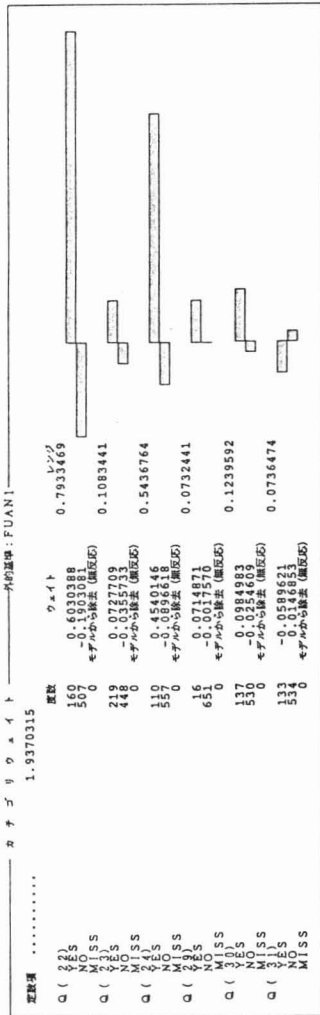


図3-3 大学生生活への不安と神経症不安(沖縄)

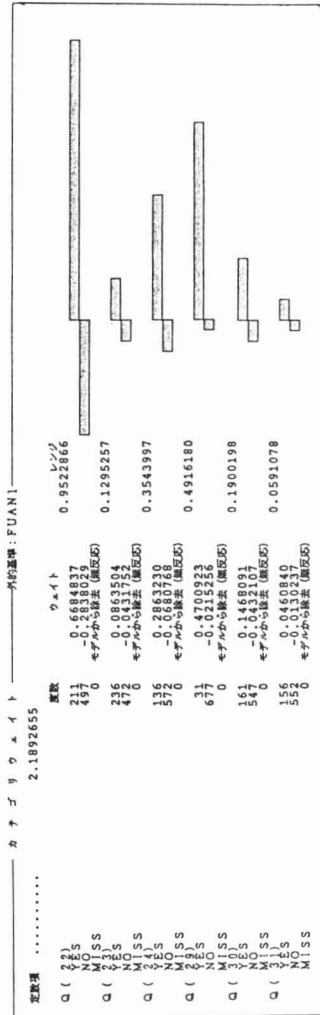


図3-4 大学生生活への不安と神経症不安(男子)

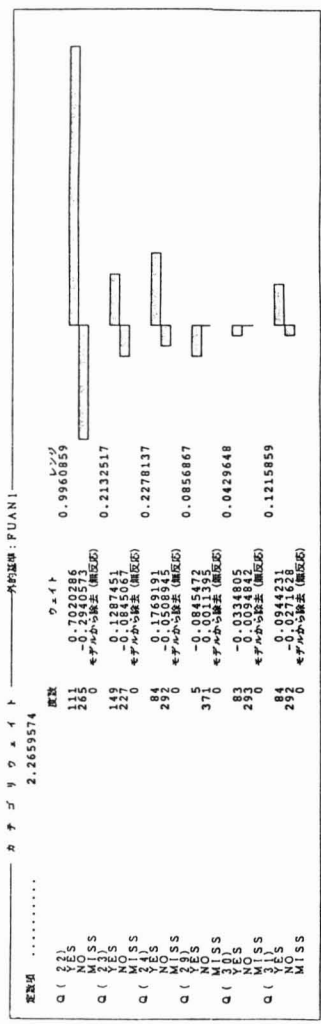


図 3-5 大学生活への不安と神経症不安 (女子)

3-2 大学生活への「不安」と不安の身体化

図3-6は全被験者の大学生活への「不安」を外的基準、不安の身体化の各項目を説明変数とする数量化Ⅰ類の分析結果である。その結果、Q33「自分の健康のことが心配」、Q34「日によって体の具合の悪いところが移動する」、Q35「その時の気分によって症状がよくなったり悪くなったりする」という項目への肯定的反応のウエイトが高く、大学生活への「不安」と強くかかわっていることがわかる。Q32「自分の身体や病気のことに非常に関心をもっている」という項目は肯定・否定どちらもウエイトが低く、大学生活への「不安」と関係の弱いことがわかる。

出身地域別に検討していくと、図3-7、図3-8に示すように、Q34への肯定的反応に出身地域差が見られる。すなわち九州出身者のQ34への肯定的反応のウエイトが高い結果にある。

大学生活への「不安」と不安の身体化の関係には、出身地域差より性差が顕著である。図3-9、図3-10に示されるように、男子では、Q33、Q35への肯定的反応のウエイトが女子に比較して顕著に高いが、逆に女子ではQ34への肯定的反応のウエイトが顕著に高いことがわかる。この結果は女子の生理的機能に併なう心理的不安定感に関係した結果であろう。また女子ではQ32への肯定、否定どちらもウエイトが極端に低く、大学生活への「不安」と関係のないことがわかる。

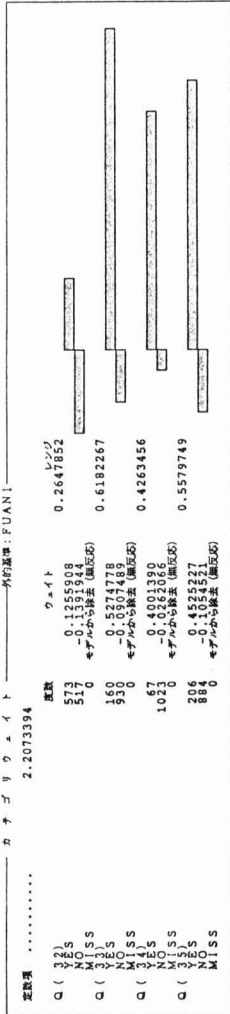


図 3-6 大学生生活への不安と不安の身体化 (全体)

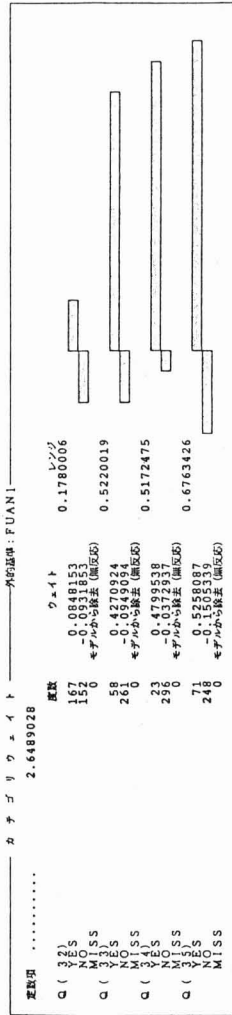


図 3-7 大学生生活への不安と不安の身体化 (九州)

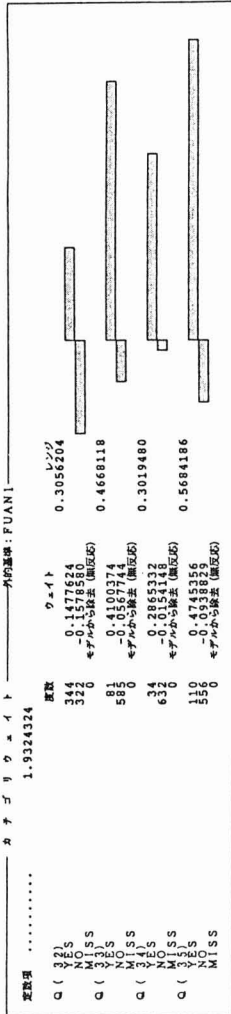


図3-8 大学生活への不安と不安の身体化(沖繩)

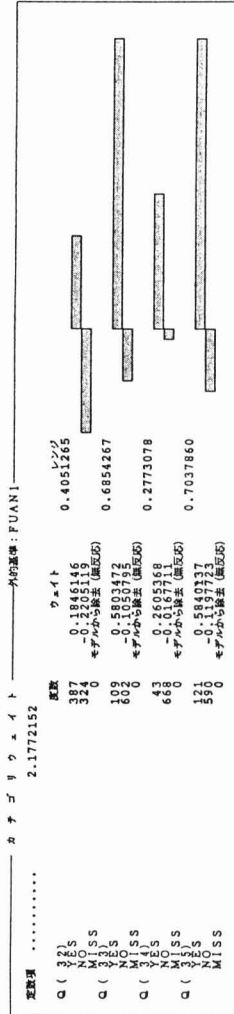


図3-9 大学生活への不安と不安の身体化(男子)

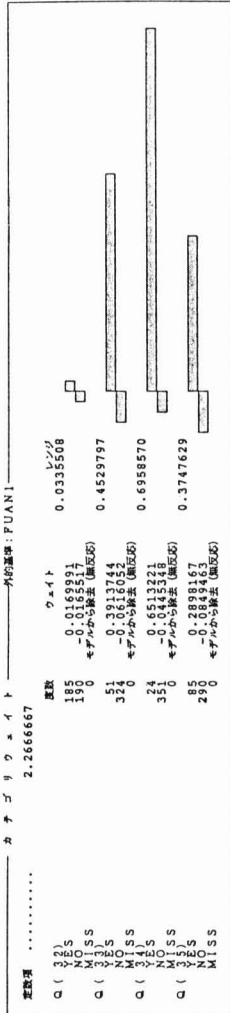


図3-10 大学生活への不安と不安の身体化(女子)

3-3 大学生活への「不安」と不安の外在化

神経症不安は自覚が困難であり、姿を変えて表現されることが多い。すなわち、外界に投射し、恐怖症に結びつくことが多いと考えられる。このような観点から見ると、不安の外在化の程度と大学生活への「不安」には関係の強いことが予想される。

図3-11は大学生活への「不安」を外的基準、不安の外在化の各項目を説明変数とする数量化Ⅰ類による分析結果である。その結果、Q25「ひとりで外出するのが不安」という項目への肯定的反応のウエイトだけが高く、Q26「新聞やラジオで怖いニュースを見聞するとひどくおびえる」、Q27「いつもそわそわして落ちつかない」に対する反応のウエイトは低い結果にある。出身地域別では、九州と沖縄に大きな差異は見られないが、Q26への肯定・否定のウエイトが九州と沖縄では逆転した結果になっている(図3-12、図3-13)。

続いて性差について検討していく。図3-14、図3-15に示されるように、女子ではQ26、Q27への肯定的反応のウエイトが高く、女子の恐怖症傾向は大学生活への「不安」を十分に予測させている。この結果から、女子の恐怖症傾向は般化の程度が大きいことがわかる。

当初予測したように、不安の外在化は大学生活への「不安」を十分には予測しえていないが、Q25、Q26、Q27に対する通過率が極端に低いことと無関係ではないであろう。

カチゴロウエイ		外的基準：FUANI	
定数項	2.2165138		
q (25)		ウェイト	レンジ
MISS	110	0.7631512	0.8488111
MISS	98	-0.0825598	
MISS	0	モデルから除去 (無反応)	
q (26)	40	0.1035159	0.1074593
MISS	105	-0.0033435	
MISS	0	モデルから除去 (無反応)	
q (27)	82	0.2078687	0.2247786
MISS	108	-0.0169100	
MISS	0	モデルから除去 (無反応)	

図 3-11 大学生生活への不安と不安の外在化 (全体)

カチゴロウエイ		外的基準：FUANI	
定数項	2.6656250		
q (25)		ウェイト	レンジ
MISS	57	0.6784827	0.8255503
MISS	26	-0.1470476	
MISS	0	モデルから除去 (無反応)	
q (26)	21	-0.2360042	0.2525798
MISS	29	-0.0165755	
MISS	0	モデルから除去 (無反応)	
q (27)	37	0.1879556	0.2125293
MISS	28	-0.0245737	
MISS	0	モデルから除去 (無反応)	

図 3-12 大学生生活への不安と不安の外在化 (九州)

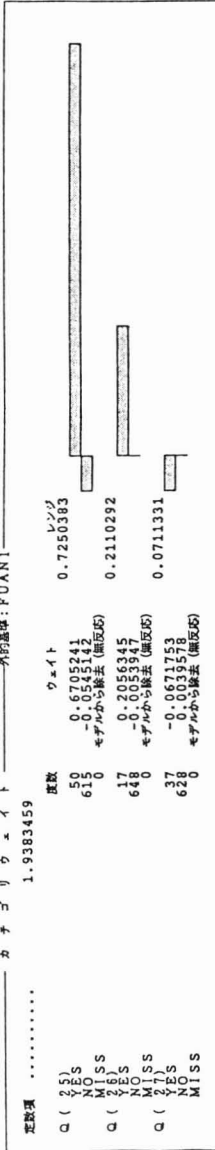


図 3-13 大学生生活への不安と不安の外在化 (沖縄)

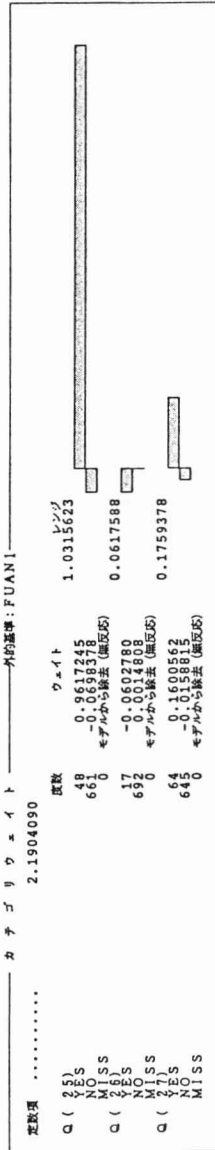


図 3-14 大学生生活への不安と不安の外在化 (男子)

定数項	カタゴリウエイト	外的基準: FUANI
2.2679045			
定数項		
Q (YES)	62	ウエイト	レンジ
MISS	315	0.5662688	0.6777249
Q (YES)	23	-0.1114581	
MISS	354	モデルから除去 (無応答)	
Q (YES)	23	0.2405788	
MISS	354	-0.0153088	0.2562096
Q (YES)	18	モデルから除去 (無応答)	
MISS	359	0.3683503	0.3868191
		-0.0184688	
		モデルから除去 (無応答)	

図 3-15 大学生生活への不安と不安の外在化 (女子)

3-4 大学生生活への「不安」と消化器不調感

先述した不安の身体化が漠然とした心身症を想起させるのに対して、明確な形での心身症の有無とそれを自覚させているのが消化器不調感と後述する循環器不調感である。このような予測から消化器不調感があることは特性レベルでの不安が高く、従って大学生生活への「不安」の生起も高いことが考えられる。

図3-16は全被験者を対象として、大学生生活への「不安」を外的基準、消化器不調感の各項目を説明変数とする数量化Ⅰ類の分析結果を示している。図からわかるようにQ65「いつもあまり食欲がない」、Q80「いつも胃がもたれるような感じがする」、Q81「よく吐き気がしたり、吐いたりする」、Q84「よく腹が痛む」という消化器不調感への肯定的反応へのウエイトが高く、消化器不調感は大学生生活への「不安」をいなくかどうかに大きくかかっているといえる。

出身地域別による差異を検討してみると、図3-17、図3-18に示されるように、九州出身者は沖縄出身者に比較して、Q81への肯定的反応だけのウエイトが高く、逆に沖縄出身者は、Q65への肯定的反応へのウエイトが高く、出身地域によって、大学生生活への「不安」と結びつく消化器不調感の部位に差異のあることがわかる。

次いで性差について検討してみる。図3-19、図3-20に示されるように、男子ではQ80、Q81への肯定的反応のウエイトが高く、女子ではQ65、Q84への肯定的反応へのウエイトが高く、性差が若干見られている。

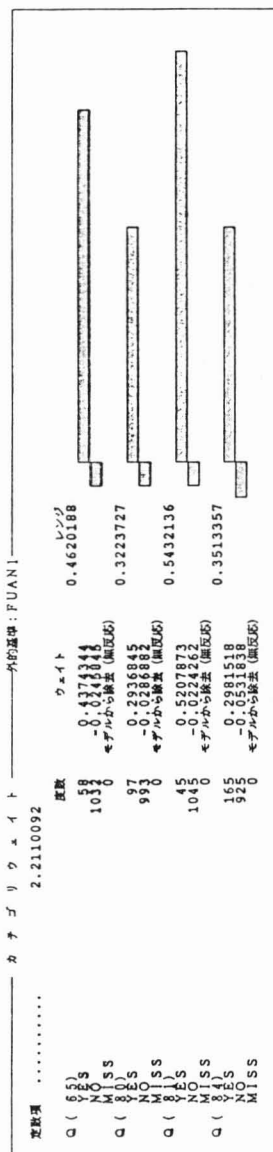


図3-16 大学生活への不安と消化器不調感 (全体)

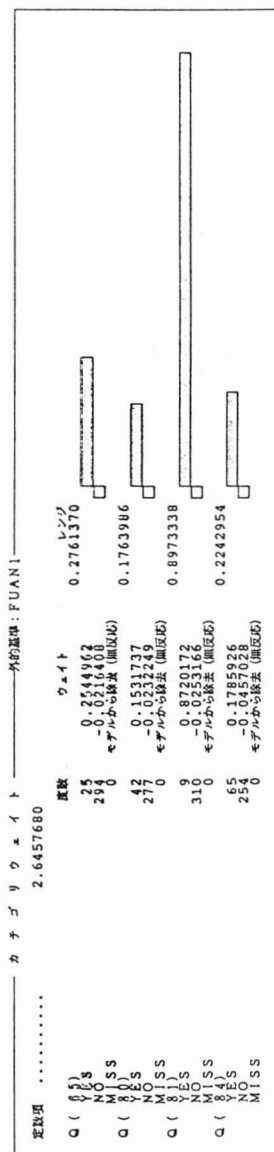


図3-17 大学生活への不安と消化器不調感 (九州)

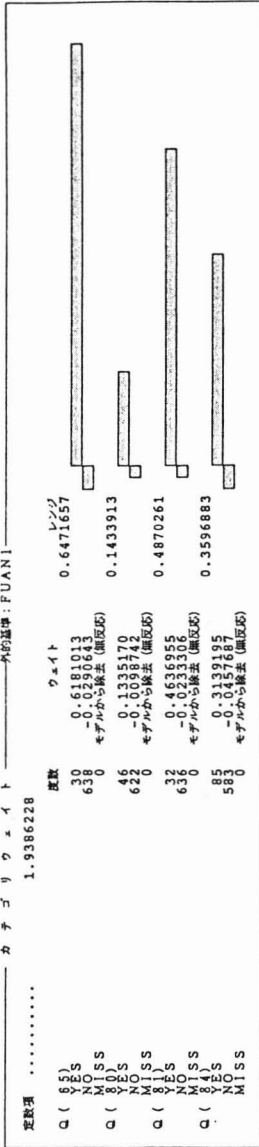


図 3-18 大学生生活への不安と消化器不調感 (沖縄)

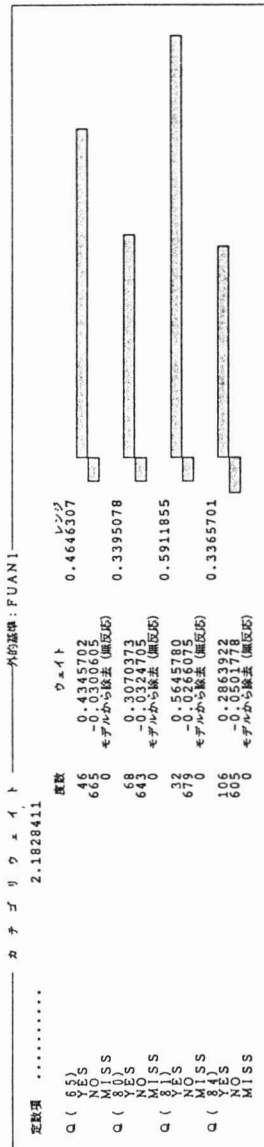


図 3-19 大学生生活への不安と消化器不調感 (男子)

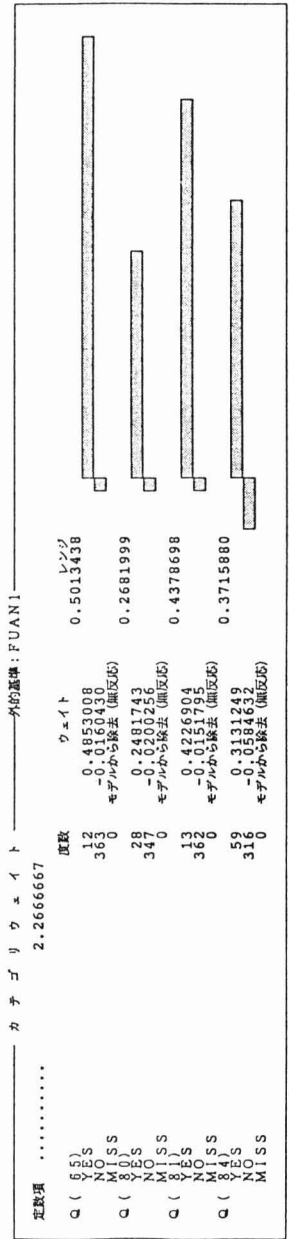


図 3-20 大学生生活への不安と消化器不調感 (女子)

3-5 大学生活への「不安」と循環器系不調感

消化器系不調感と同様に心身症の存在を具体的に明確にしているのが、循環器不調感である。消化器不調感と同様にここでも循環器不調感の有無はその背後に強い特性不安のあることが予想され、大学生活への「不安」の生起を予測させるものである。

図3-21は全被験者を対象として、大学生活への「不安」を外的基準、循環器不調感の各項目を説明度数とする数量化Ⅰ類の分析結果を示している。図に示される結果から、全体的に各項目への肯定的反応が、大学生活への「不安」の生起に関与していることがわかるが、特にQ67「よく動悸がする」への肯定的反応のウエイトが高いことがわかる。Q69「胸を圧迫されるように苦しい」、Q70「脈が急に早くなったり狂ったりする」、Q71「よく息苦しくなる」、Q72「急に体がかっと熱くなったり、寒けがしたりする」という項目への肯定的反応のウエイトはそれほど高いとはいえない。すなわち、動悸の有無は強く大学生活への「不安」の生起に関与していることがわかる。

循環器不調感が大学生活への「不安」を予測するかどうかに関しては出身地域差が若干見られる。すなわち、Q67の動悸の項目では九州出身者のウエイトが高く、Q69の胸部の苦痛感では沖縄出身者のウエイトが高い結果を示している。(図3-32、図3-23)。

循環器不調感が大学生活への「不安」の生起を説明するかどうかについては性差が顕著である。図3-24、図3-25に示されるような結果から、男子ではQ67、Q71、Q72への肯定的反応のウエイトが高く、動悸、息苦しさ、体温の急変の有無が大学生活への「不安」の生起に強く関与している。しかし、女子ではQ71、Q72へのウエイトはほとんど見られていない。逆に女子ではQ69、Q70への肯定的反応のウエイトが高く、胸部圧迫感、不整脈の有無が大学生活への「不安」の生起を説明している結果にある。

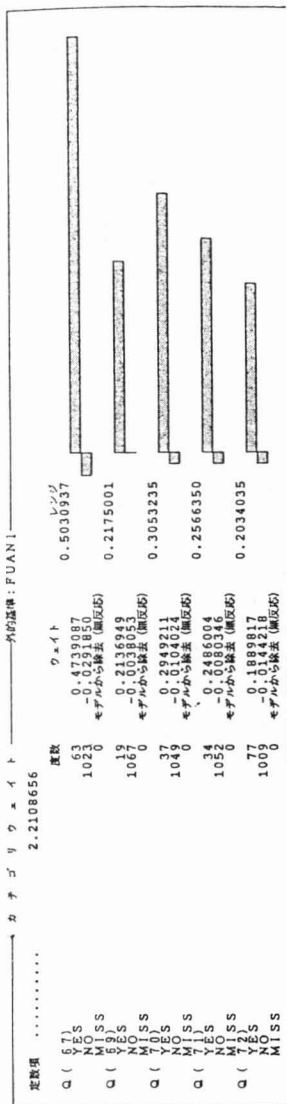


図 3-21 大学生活への不安と循環器不調感 (全体)

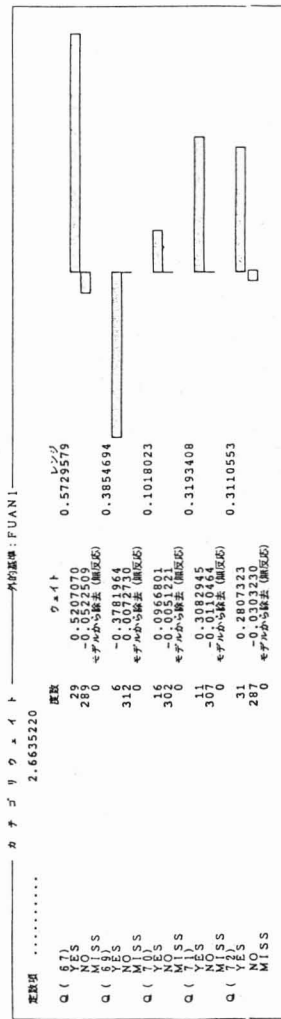


図 3-22 大学生活への不安と循環器不調感 (九州)

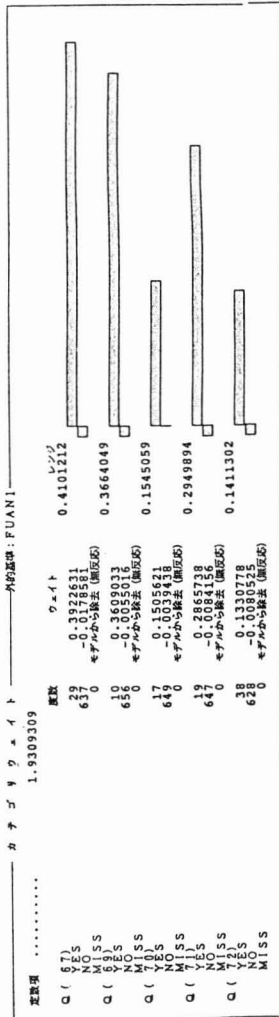


図 3-23 大学生生活への不安と循環器不調感 (沖繩)

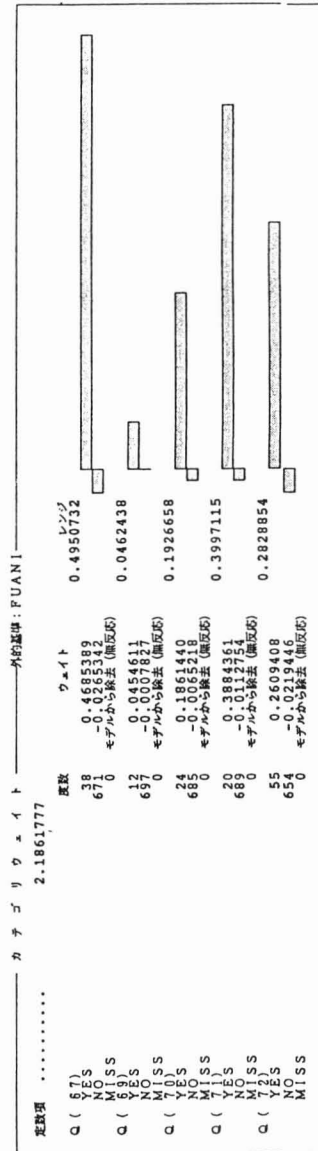


図 3-24 大学生生活への不安と循環器不調感 (男子)

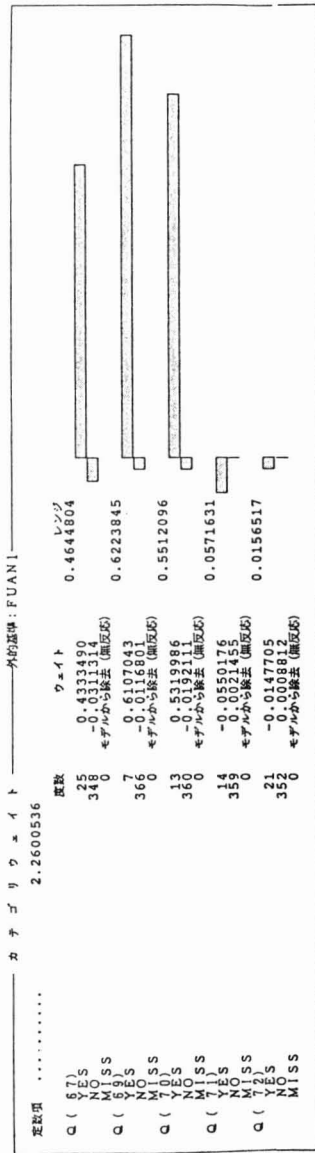


図3-25 大学生生活への不安と循環器不調感 (女子)

3-6 大学生活への「不安」とうつ傾向

これまで説明変数として用いた各要因は不安神経症レベルの問題と関係していたのに対し、うつ傾向、分裂傾向の項目はより重篤な精神病理的な問題に関係していることになる。このような観点からすると、うつ傾向、分裂傾向の有無はより強い、複雑な特性不安の有無を予測させ、日常生活における適応行動を大きく阻害する要因として浮び上がってくる。

先ず大学生活への「不安」とうつ傾向の関係について検討する。図3-26は全被験者を対象として、大学生活への「不安」を外的基準、うつ傾向の各項目を説明変数とする数量化Ⅰ類の分析結果を示している。Q51「いっそ死んでしまいたい」という項目を除き、Q44「何をしても楽しくなく気がめいる」、Q45「いつも不幸で憂うつ」、Q46「何をすることもおっくうで意欲がわからない」、Q49「たえず罪悪感に悩んでいる」、Q50「将来に全く希望がないように思える」への肯定的反応のウエイトが高く、うつ傾向の有無が大学生活への「不安」の生起に強く関係していることがわかる。

出身地域別に比較してみると九州出身者はQ44、Q49、Q50への肯定的反応のウエイトが沖縄出身者より高く、九州出身者のうつ傾向は大学生活への「不安」と強く関係していることがわかる。(図3-27、図3-28)。

性別では男子においてQ44、Q49、Q50における肯定的反応のウエイトが女子より高く、逆に女子ではQ45への肯定的反応のウエイトのみが高い結果を示している。多分に要求水準が高い男子の方が要求の満たされないことに帰因するうつ傾向が高いことを反映した結果であろうと思われる(図3-29、図3-30)。

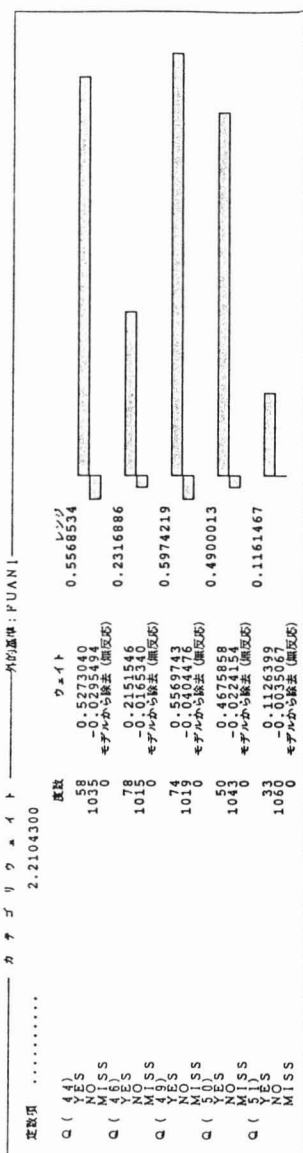


図3-26 大学生生活への不安とうつ傾向 (全体)

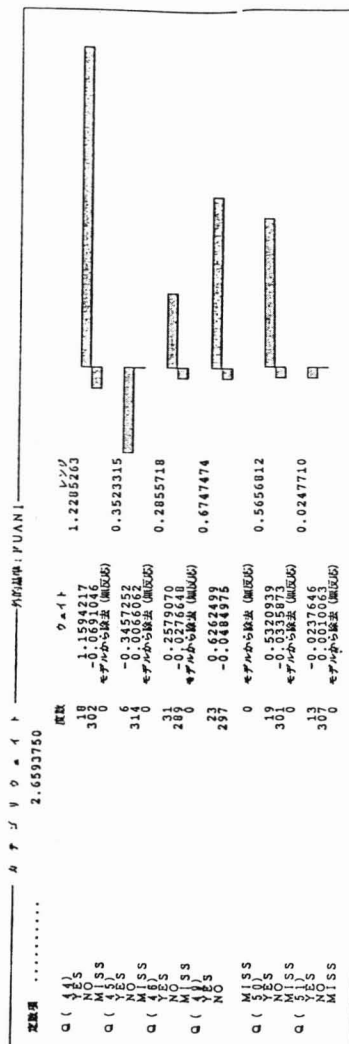


図3-27 大学生生活への不安とうつ傾向 (九州)

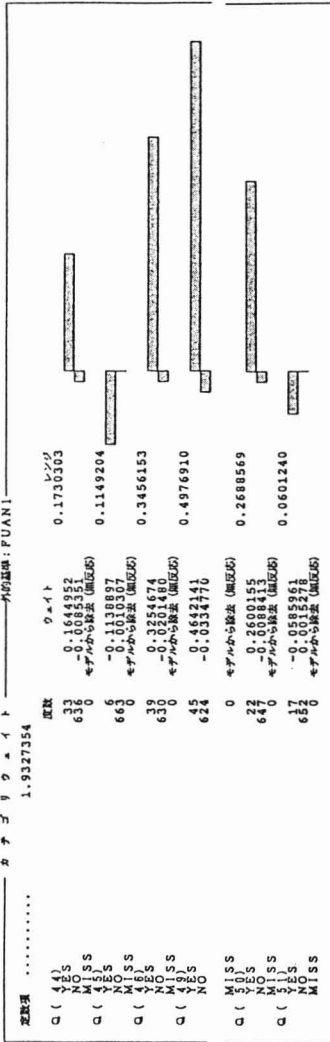


図 3-28 大学生生活への不安とうつ傾向(沖繩)

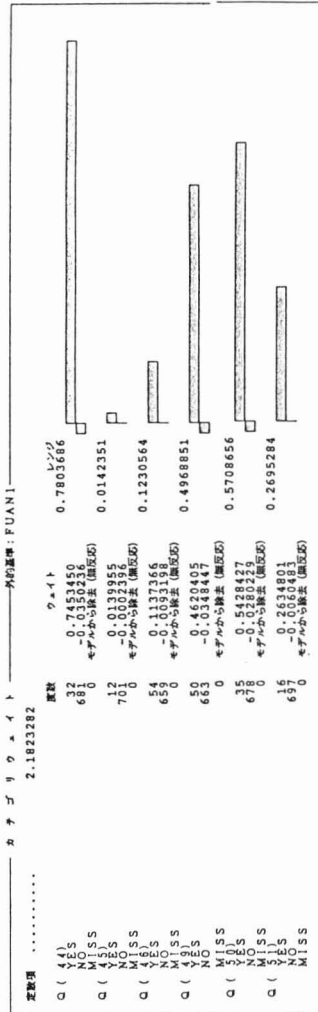


図 3-29 大学生生活への不安とうつ傾向(男子)

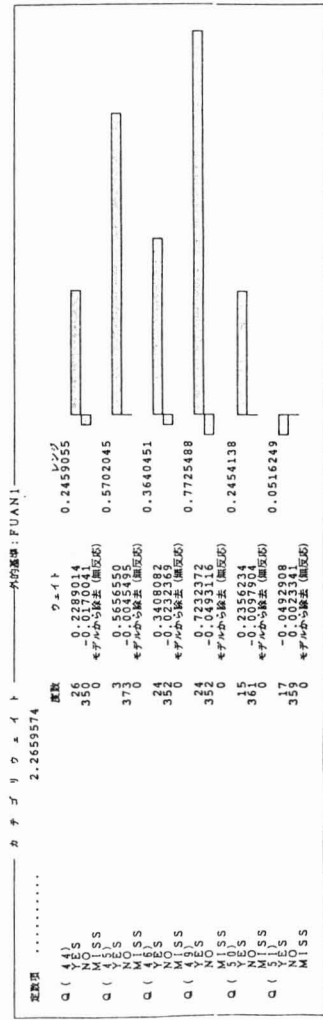


図 3-30 大学生生活への不安とうつ傾向 (女子)

3-7 大学生活への「不安」と分裂傾向

数量化Ⅲ類による分析の結果、Q39、Q42、Q52、Q53、Q55、Q58に高い負荷を示した項目は、恐怖、強迫、離人感、劣等感、対人緊張をその特徴としていることから、分裂傾向に関与している尺度と見なした。多分に自我機能の低下を中心とした病的傾向であると思われる。これまでと同様に、大学生活への「不安」を外的基準、分裂傾向の各項目を説明変数とする数量化Ⅰ類による分析結果が図3-31である。図からわかるように、Q55の現実感喪失の項目を除き、他のすべての項目への肯定的反応のウエイトが高く、分裂傾向は、大学生活への「不安」の生起をよく説明しうる要因となっている。Q55の現実感の喪失は、地域別、性別による分析でもウエイトが極端に低いが、この結果は現実感の喪失が強い自我障害と結びつくことと関係しているかも知れない。

図3-32、図3-33は出身地域別に示した数量化Ⅰ類の結果を示している。図から地域別に差異のあることがわかる。九州出身者ではQ52「自分が自分でないような感じがする」、Q53「劣等感が強い」への肯定的反応のウエイトが高く、自我の離人感と強い劣等感が大学生活への「不安」を強く説明している。それに対して沖縄出身者は、Q39「特定の状況に対する恐怖心がある」への肯定的反応へのウエイトが高い結果を示し、出身地域差が見られている。

次に性差について比較してみる。男子では、Q39、Q52、Q55への肯定的反応のウエイトが高く、女子ではQ58への肯定的反応へのウエイトのみが高い結果にある。このような結果から、女子より男子の自我機能の障害が高く、より強く大学生活への「不安」に結びついているものと考えられる(図3-34、図3-35)。

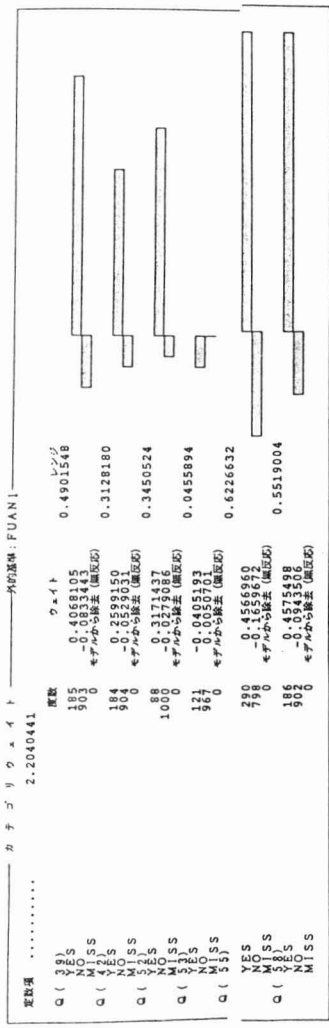


図3-31 大学生活への不安と分裂傾向(全体)

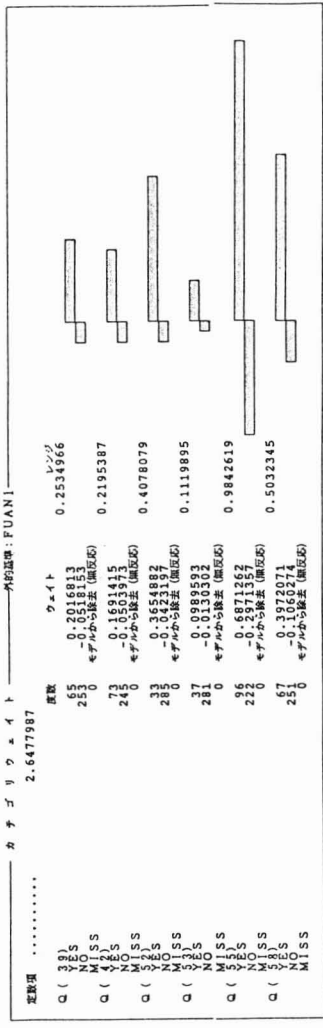


図3-32 大学生活への不安と分裂傾向(九州)

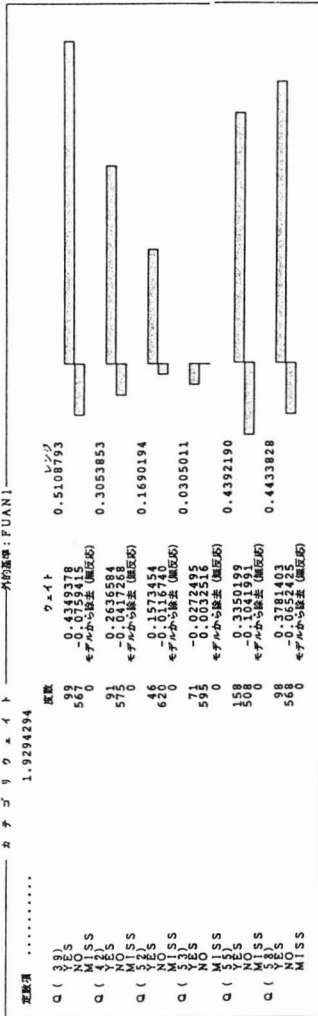


図 3-33 大学生生活への不安と分裂傾向(沖繩)

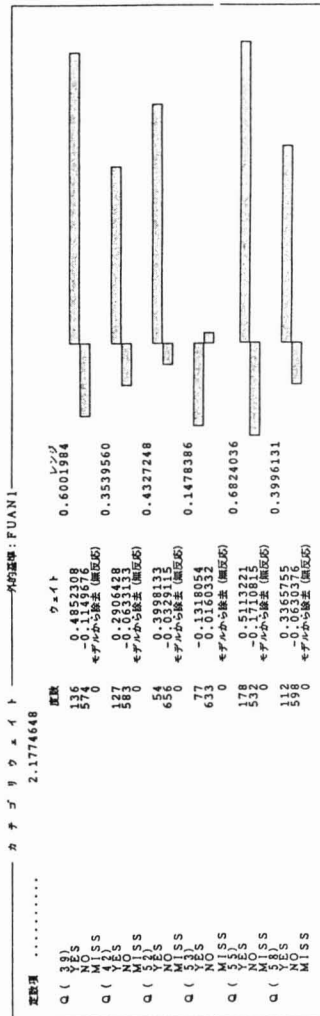


図 3-34 大学生生活への不安と分裂傾向(男子)

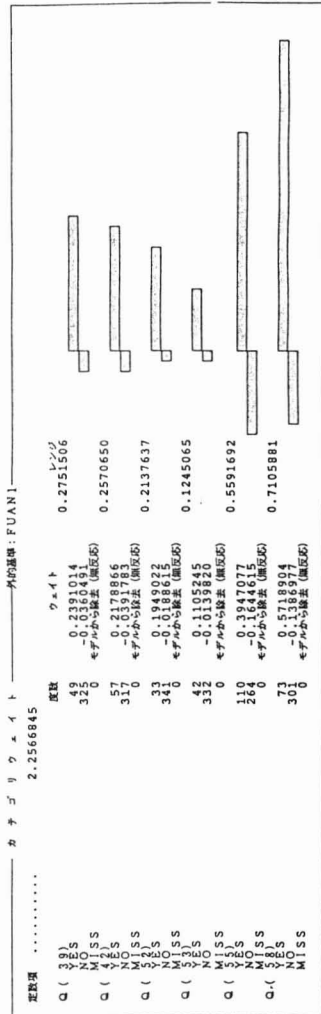


図3-35 大学生活への不安と分裂傾向(女子)

以上に述べてきたように、新入生がいだく大学生活への「不安」に、不安神経症、心身症、うつ傾向、分裂傾向が少なからず関与していることがわかる。しかし、具体的にどのような症状がよく大学生活への「不安」を説明するかについては、出身地域、性によって多少とも異なることがわかる。ここで改めて出身地域別、性別などの主なデモグラフィック要因に基づく分類を施した上での数量化Ⅲ類による尺度の分類が必要となってくる。

参考文献

- 上地安昭 1973 現代人と神経症 保健シリーズ第18集、広島大学保健管理センター(編)
- 笠原 嘉 1977 青年期—精神病理学から— 中央公論社
- 中村完・新里里春・島袋恒男・井村修、1986、大学生の適応に関する心理学的研究—琉球大学の新入生を対象として—、琉球大学法文学部紀要 社会学編 第29号
- 藤土圭三編 1979 現代学生の精神衛生—若者指導のためのハンドブッカー—、北大路書房